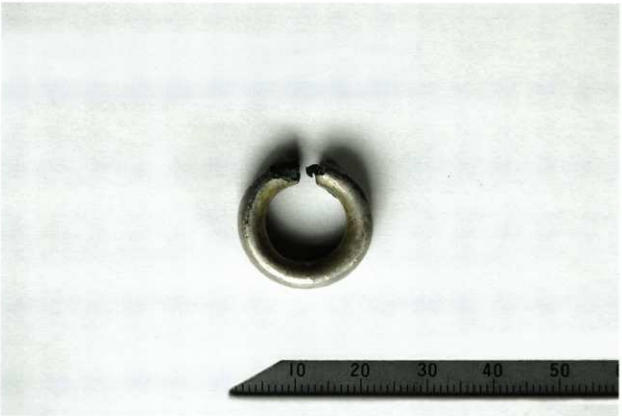
南あわじ市文化財調査報告書　第６集

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅴ

２００８年度　埋蔵文化財調査

２０１２ 年 ３ 月

南あわじ市教育委員会



九蔵遺跡　６次調査　Ｄ地区出土　耳環

九蔵遺跡　６次調査　Ｂ－６北西地区　中世墓（墓59）

はじめに

全国的には終了しつつある圃場整備事業でありますが、広大な農地を有する南あわじ市では現在も圃場整備事業を主とする大規模開発が続いており、埋蔵文化財行政にとって非常に厳しい状況であります。しかし、一方で発掘調査によって得られた新たな知見の増加により、古代に淡路国府の置かれた南あわじ市の重要性や、他の時代においても非常に興味深い地域であることがますます明らかになりつつあることは、当市の文化財行政にとって喜ばしいことであります。

この開発事業に伴う発掘調査から得られた資料は、我々の祖先の営みを探ると同時にふるさと淡路を知る資料になり、今後後世に継承していくことが現代社会に生きる我々の重要な責務と認識しております。

今回刊行いたします年報は、調査概要という不十分な形ではあると思いますが、今後もさらなる努力により地域史の解明と当市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、厚くお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会
教育長　岡　田　昌　史

例　　言

1．本書は南あわじ市教育委員会が2008(平成20)年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。
2．調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫が担当した。
3．出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・筒井健司・富岡美早子・豊田亜希子・濵崎真紀・濱本善美・桝本早苗・三宅靖子が行った。
4．本書の編集は定松が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧に記す。
5．各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、多くの方々のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。（敬称略）
荒木浩司・伊藤宏幸・浦上雅史・岡本一秀・鈴木啓之・藤本史子・森岡秀人・渡辺晃宏・
中世土器研究会

目　　次

巻頭写真図版

はじめに

例　　言

第１章　埋蔵文化財事業の動向 …… 1

第２章　埋蔵文化財調査の成果

第１節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 …… 2

第２節　主な埋蔵文化財調査の成果

1　立石遺跡（３次調査） …… 4
2　才門遺跡（２次調査） …… 7
3　大野遺跡（３次調査） …… 10
4　大野遺跡（４次調査） …… 13
5　九歳遺跡（６次調査） …… 19
6　佐保谷瓦窯跡（１次調査） …… 28
7　大野遺跡（５次調査） …… 31
8　井手田遺跡（１次調査） …… 35
9　木戸原遺跡（８次調査） …… 43
10　淡路国分寺跡（18次調査） …… 46

第１章　埋蔵文化財事業の動向

平成20年度は分布調査６件、試掘調査１件、確認調査４件、本発掘調査６件を行っている。分布調査の内１件は新規の圃場整備事業である。分布92.31ha、試掘８㎡、確認885.3㎡、本発掘7,292.67㎡、分布を除く調査面積合計が8,185.97㎡となり、ここ数年の調査面積と比較してもやや減少傾向にある。

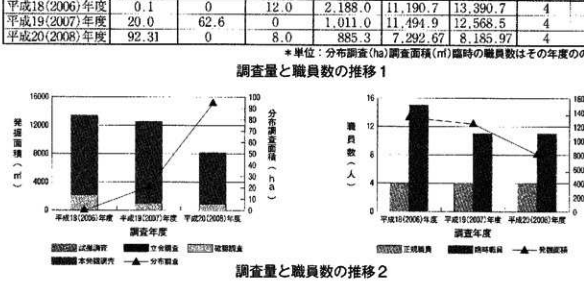
主な発掘調査は、最終調査となった経営体育成基盤整備事業の市西地区、同じく経営体育成基盤整備事業の阿万本庄地区・御陵地区、団体営圃場整備事業の八幡地区や東沖田地区を行った。

主な調査成果は、東沖田地区（九歳遺跡）では縄文～中世にかけての遺構を、御陵地区（才門遺跡）では古代の掘立柱建物など、阿万本庄地区（井手田遺跡）では古墳時代の遺物を多く確認した。

年　　度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							正規	臨時
平成18(2006)年度	0.1	0	12.0	2,188.0	11,190.7	13,390.7	4	15
平成19(2007)年度	20.0	62.6	0	1,011.0	11,494.9	12,568.5	4	11
平成20(2008)年度	92.31	0	8.0	885.3	7,292.67	8,185.97	4	11

＊単位：分布調査(ha)調査面積(㎡)臨時の職員数はその年度ののべ人数

調査量と職員数の推移１



調査量と職員数の推移２

啓蒙普及活動としては、トライやるウィークで三原中学校（５月12～16日）４名、南淡中学校（５月26～30日）３名を受け入れた。５月26日に賀集小学校５年生44人を対象に出前授業を行った。また、発掘調査速報展－平成17・18年度調査－を市内３ケ所に巡回した。広報に「南あわじの文化財」と題して地上文化財と埋蔵文化財を隔月で掲載し、現在７年目を迎えている。埋蔵文化財調査事務所では展示スペースがないため教育委員会が所在する西淡公民館で、本年度より年３回の展示物入れ替えを目標に不定期の埋蔵文化財ミニ展示を開始する。第１回は古代官衙遺跡の嫁ヶ渕遺跡、第２回は中世の武士階級の建物が確認された大畑・後山遺跡の出土遺物などを展示した。

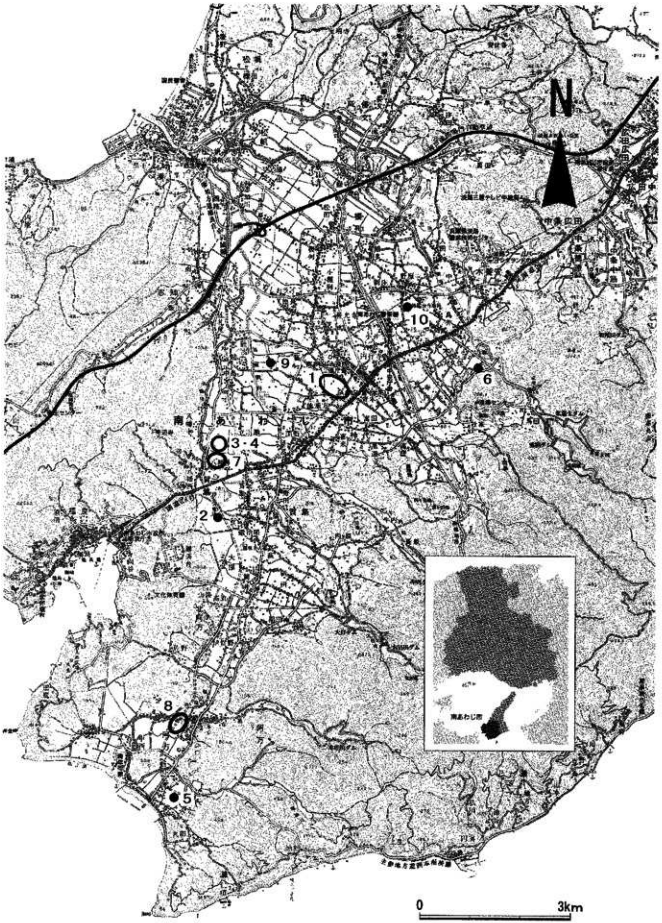
出前授業

埋蔵文化財ミニ展示

第２章　埋蔵文化財調査の成果

第１節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図

No	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
	大型店舗設置事業	分布	6,165㎡	坂口		広田	広田上	H20.5.16	採集遺物なし
1	経営体育成基盤整備事業(市西地区)	本発掘	1,771.3㎡	定松	立石	市	三條	H20.5.19～9.25	平安・室町時代・近世の遺構・遺物確認
2	経営体育成基盤整備事業(御陵地区)	本発掘	1,570㎡	的崎	才門	賀集	鍛冶屋	H20.6.13～7.25	古墳・奈良・平安時代の遺構・遺物確認
3	基盤整備促進事業(八幡地区)	確認	164㎡	坂口	大野	賀集	八幡南	H20.6.16～27	奈良・平安時代・中世・近世の遺構・遺物確認
4	基盤整備促進事業(八幡地区)	本発掘	543.3㎡	坂口	大野	賀集	八幡南	H20.7.17～8.28	奈良～鎌倉時代の遺構・遺物確認
5	基盤整備促進事業(東沖田地区)・市道阿万１９０号線道路改良事業	本発掘	2,452㎡	山崎	九殿	阿万	東町	H20.8.1～11.6	縄文・弥生・飛鳥・奈良時代・中世の遺構・遺物確認
6	分譲住宅用地造成事業	確認	45.3㎡	坂口	佐保谷瓦窯跡	八木	大久保	H20.8.29～9.3	古代の瓦等の遺物は出土したが、遺構未確認
7	基盤整備促進事業(八幡地区)	確認	268㎡	坂口	大野	賀集	八幡南	H20.9.22～11.7	縄文・奈良時代・中世の遺構・遺物確認
8	経営体育成基盤整備事業(阿万本庄地区)	確認	408㎡	山崎	井手田	阿万	上町	H20.10.15～11.6	弥生～中世の遺構・遺物確認
9	市道倭長中島線道路改良事業	本発掘	945.07㎡	的崎・定松	木戸原	市	新	H20.10.27～H21.1.29	弥生時代中期の遺物、古墳時代前期の遺構・遺物確認
10	国分寺浄化槽設置事業	本発掘	11㎡	坂口	淡路国分寺跡	八木	国分	H20.11.10～27	９世紀頃を中心とする遺構・遺物確認
	県営圃場整備事業(新田地区)	分布	90ha	坂口	有塚	北阿万	堀田南	H21.1.13～2.13	近世以前の遺物を５ヶ所で採集
	市道賀集201号線道路改良事業(賀集鍛冶屋地区)	分布	0.5ha	坂口	神子曽	賀集	鍛冶屋	H21.2.16	土師質土器・須恵器・サヌカイト片・陶磁器を多く採集
	市道茶屋池線道路新設改良事業(八木貴宜上地区)	分布	0.77ha	坂口		八木	貴宜上	H21.2.16	採集遺物なし
	賀集宅地造成事業	分布	2,196.46㎡	坂口		賀集	野田	H21.2.16	採集遺物なし
	市道秋葉道２号線道路改良事業(阿那賀地区)	分布	0.2ha	坂口	丸山	阿那賀	鳥	H21.2.17	土師質土器・須恵器・サヌカイト片・陶磁器を採集
	倉庫新築工事(民間)	試掘	8㎡	山崎		松帆	古津路	H21.2.27	撹乱を受けており、遺構・遺物未確認



調査位置図

第２節　主な埋蔵文化財調査の成果

1　立石遺跡　－３次調査－

所 在 地　市三條～市福永字立石外
事 業 名　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　定松佳重
種　　別　本発掘調査
調査期間　平成20年５月19日～９月25日
調査面積　1,771.3㎡

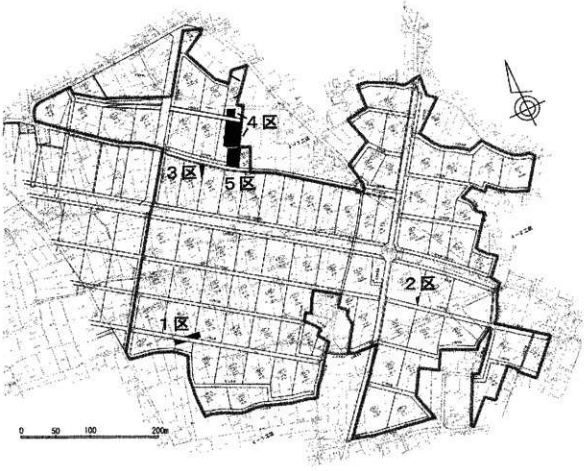
調査の位置

1　調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野中央部の標高32.2～38.7mを測る緩斜面に位置し、南あわじ特産の玉ねぎの栽培が盛んに行われている。

周辺には西に弥生時代中～後期・古墳時代中期・律令期・中世の木戸原遺跡や奈良時代の山畑廃寺跡、南西には室町時代の地頭方殿の土居館跡、東には室町時代の供養塔である桜塚が立地する。

以下、成果のあった調査区のみ記述する。



調査区設定図

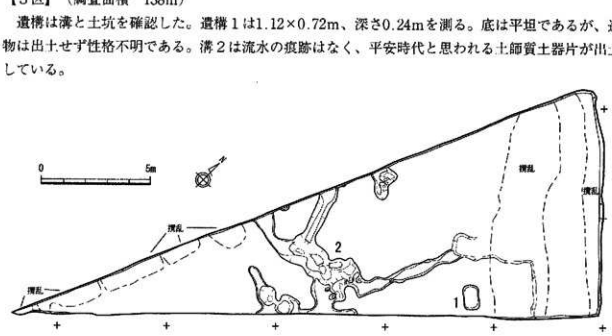
【1区】（調査面積　180.9㎡）

中央に新設の農道が入るため、東西に調査区が分かれる。遺構は土坑を多く確認した。柱穴と思われる土坑もあるが、建物は構成しない。遺構は切り合いがあるため2時期あるが、出土する土器からは大きな時期差は認められない。

遺物は土師質土器や羽釜・須恵器こね鉢・陶器片が出土し、瓦器はなく、15世紀前半（室町時代）と考えられる。遺構65・79・80からは焼土塊が出土した。特に遺構80からは多く出土したが、これらの遺構が火を受けた痕跡はない。しかし、この3基の遺構は近接しており、南側の新設農道部分に焼土塊を発生させるなんらかの遺構の埋蔵が考えられる。

【3区】（調査面積　138㎡）

遺構は溝と土坑を確認した。遺構1は1.12×0.72m、深さ0.24mを測る。底は平坦であるが、遺物は出土せず性格不明である。溝2は流水の痕跡はなく、平安時代と思われる土師質土器片が出土している。



3区　平面図

【4区】（調査面積　967.4㎡）

中央に農道が入るため、南北に調査区が分かれる。1～7区の南ブロックでは、土坑や溝状遺構の他に旧畦畔・近代撹乱が確認された。

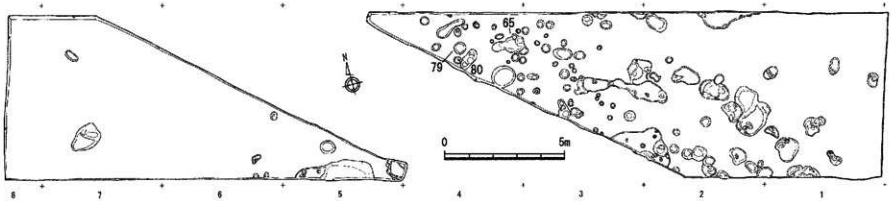
遺構18・29・45は遺物が出土せず、性格は不明である。他にも同様の土坑（遺構37・39）があるが、遺構37は近代撹乱を切って掘り込まれていることから、この2基の土坑は新しいものと考える。

北ブロックでは遺構55・57より西に向かって大きく傾斜しており、シルトとかなりきめの細かい細砂質土が堆積する。ここからはやや古い土師質土器片が出土しており、平安時代の可能性が考えられる。

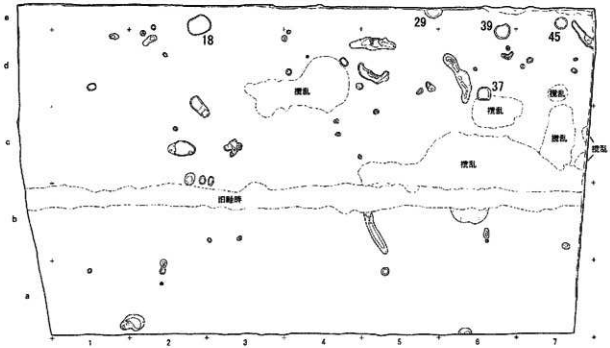
2　まとめ

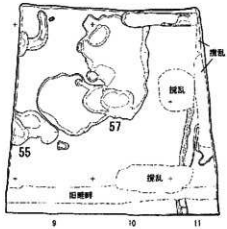
本調査では中世の遺跡であることがわかった。確認調査結果より4・5区での遺構検出を想定していたが、反して1区で多く確認した。1区で出土した土器の多くは羽釜であり、一般集落の存在が考えられる。また、1区包含層からはサヌカイト製の石鏃も出土しており、平成19年度調査でも庄内併行期の竪穴住居が見つかっていることから、1区西から南にかけて庄内併行期の遺構の埋蔵が考えられる。

（定松）


65
79
80
N
0
5m
8
7
6
5
4
3
2
1

1区　平面図


18
29
39
45
37
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
旧畦畔
a
b
c
d
e
1
2
3
4
5
6
7


撹乱
撹乱
57
55
撹乱
旧畦畔
9
10
11

0
5m

4区　平面図

2　才門（さいかど）遺跡　－2次調査－

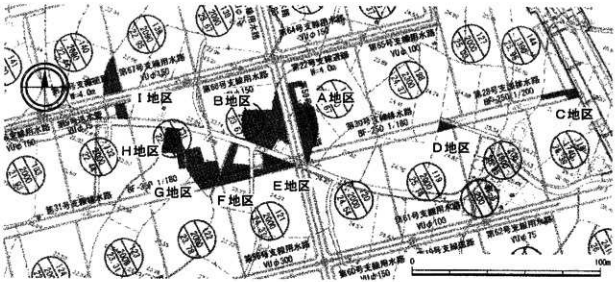
所在地	賀集鍛冶屋字才門外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	的崎薫
種　別	本発掘調査
調査期間	平成20年6月13日～7月25日
調査面積	1,570㎡

調査の位置

1　調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野の南西端に位置し、標高22.6～26.0mの緩斜面に立地する田圃地帯である。周辺には調査地東部に接して県道洲本灘賀集線が南北に走り、当遺跡の他に縄文時代や弥生時代の遺構が顕著であった神子曽遺跡や奈良時代の建物や溝などが確認された石田遺跡が県教育委員会によって調査されている。

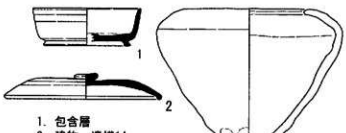
上記事業に伴って確認調査を行った結果、古代の遺構・遺物を確認したことから、事業施工によって遺跡に影響の及ぶ排水路部分と圃場面に関して記録保存を行うこととなった。調査はA～I地区に分けて行った。以下、成果のあった調査区のみ記述する。



調査設定図

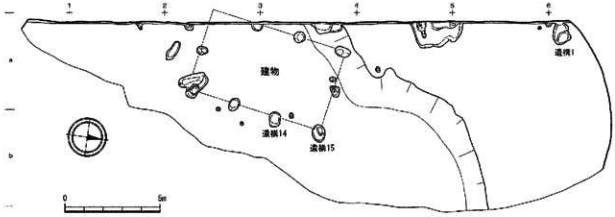
〔A地区〕

260㎡の調査を行った。調査区の6区より北側は礫層が広がっていて遺構は確認できなかった。6区より南側では掘立柱建物1棟と土坑などを確認した。掘立柱建物は梁行2間×桁行3間で1間の柱間は梁行が2.1m、桁行が2.3mである。建物の柱穴である遺構14からは8世紀前半の須恵器坏蓋、



A地区　出土遺物

遺構15からは丸底Ⅳａ式の製塩土器が出土している。また、遺構１からは古墳時代前期の土師器高坏や甕が出土している。３～５区の東側は低湿地となり、湧水がみられることから生活には適していなかったものと思われる。



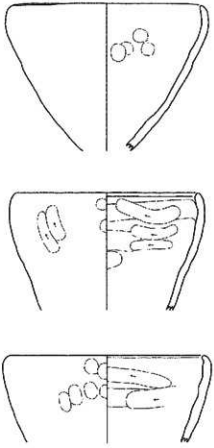
A地区　平面図

〔Ｆ地区〕

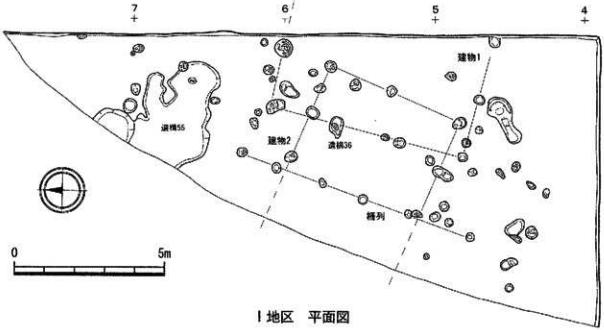
176㎡の調査を行った。後世の削平が遺構面までおよんでいたため、非常に浅い地点で遺構を確認した。幅５ｍほどの不定形な土坑として浅く僅かに残っていた遺構５の南部では直径１ｍほどの範囲で焼土が広がっており、そこに丸底Ⅳa式の製塩土器が密集していた。ここで製塩作業が行われていたかは不明である。

〔Ｉ地区〕

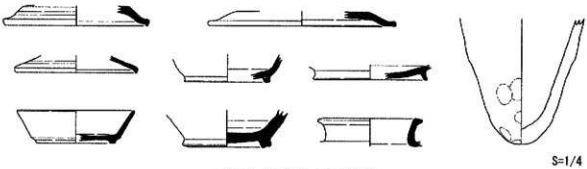
193㎡の調査を行った。全域が黄褐色粘砂質土の安定したベースをしている。１～３区は遺構の密度が低かったが４区より北では掘立柱建物２棟や柵列を確認した。建物１は東西２間以上×南北３間で、東西の１間の柱間は2.0m、南北は2.2mである。この建物の西側にはほぼ並行して柵列が並ぶ。建物２は東西３間以上×南北２間で、東西の１間の柱間は1.6mと2.3m以上、南北は2.2mと2.4mである。柱穴からは製塩土器が出土している。建物１と２は重なっているため同時併存ではないが、遺構の切り合いがみられないためその前後関係は不明である。遺構55からは小片ではあるが８世紀後半～末の須恵器の坏身や坏蓋・埦のほかに製塩土器や竈片が出土している。この竈片の同一個体が建物１の柱穴である遺構36からも出土しているため、建物１はこの時期と考えられる。遺構面直上の包含層からも８世紀後半～末の遺物が出土している。



Ｆ地区　遺構5　出土遺物



Ⅰ地区　平面図



Ⅰ地区　包含層　出土遺物

2　まとめ

調査地のある賀集鍛冶屋から八幡にかけては、古代の淡路国三原郡役所である郡衙の所在地であったとする考えがある。この地域は近年の発掘調査によって、次々と古代の重要な遺跡がみつかっている地域である。鍛冶屋では和同開珎の銀銭（708～709年）が採集されているが、銀銭は全国的にも出土例が少なく、県下では南あわじ市にある古代官衙である九蔵遺跡と鍛冶屋の採集品だけである。また、八幡の大野遺跡では官衙的な建物や遺物が確認され、岸ノ上遺跡では倉庫群がみつかっている。

今回の調査の結果、古墳時代前期・奈良時代～平安時代初頭の遺構を確認した。古墳時代前期の遺構は、A・B区のみでしか確認していないため、この時代の範囲はあまり広くないであろう。奈良時代～平安時代初頭の遺物や遺構は遺跡のほぼ全域で確認できることから、かなり広範囲に広がっていると思われる。内陸部でありながら、製塩土器の出土が多いのも山路川や大日川沿いにあるこの周辺の遺跡の特徴と言える。阿万の海岸部で調塩として生産された塩が陸路で運ばれ、この周辺で詰め替えなどの何らかの作業が行われた後、川を利用して海に出て、都まで運んでいった可能性が考えられている。包含層には、鎌倉時代や室町時代の遺物が含まれていることから、周辺にこの時代の遺構があると考えられる。今後はこの周辺での開発に注意を要する。　（的崎）

3　大野（おおの）遺跡　－３次調査－

所在地	賀集八幡南字里外
事業名	基盤整備促進事業
担当者	坂口弘賀
種　別	確認調査
調査期間	平成20年６月16日～６月27日
調査面積	164㎡（41ヶ所）

調査の位置

1　調査内容

本調査は、賀集八幡南地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う確認調査である。

調査地は、三原平野西部の大日川支流である山路川中流右岸域、標高11.98m～14.55を測る水田からなる。

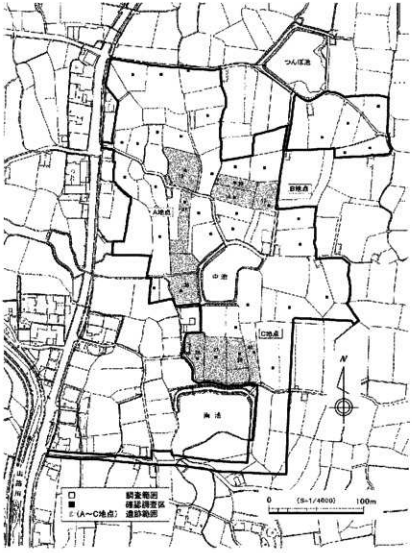
調査は、２×２ｍの調査区を41ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていった。調査の結果、大きく３ヶ所（Ａ～Ｃ地点）で遺構または遺物包含層を確認することができた。

以下主要地点の概要を述べる。

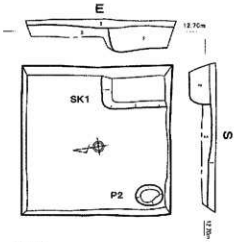
【Ａ地点】

調査地西部に位置する地区である。No.13・36・37調査区で土坑、小穴、溝などの遺構を確認した。No.13・37調査区はベースに礫が多く含まれることから、遺構との識別が困難であるが、遺構埋土は礫の含み具合が少なく、色調がわずかにうすい。遺物はNo.13のＳＫ１から土師器・瓦質土器、Ｐ２からは瓦器・土師器などが出土しており中世前半頃と考えられる。

No.36調査区において、調査区東の中池の方向から東西方向に伸びる幅40cm×深さ20cmの溝（ＳＤ１）を確認した。遺物は磁器（染付）が出土しており近世頃と思われる。湧水が著しい。

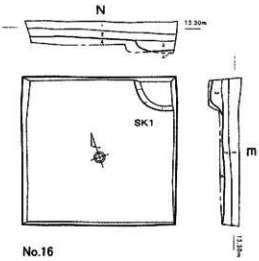


調査区設定図



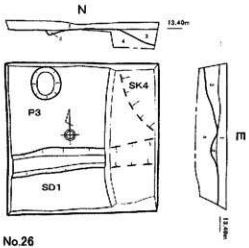
No.13

1 2.5Y7/3 浅黄色細砂質土(Feを多く含む)
2 5Y4/1 暗灰色細砂質土(φ5cm以下わずかに含む)
3 5Y6/1 暗灰色砂(φ20cm以下多く含む)



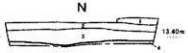
No.16

1 2.5Y7/3 浅黄色細砂質土(Feまばらに含む)
2 10YR5/1 褐灰色細砂質土
3 10YR4/1 褐灰色粘細砂質土(Mnわずかに含む)
4 5Y7/6 黄色砂



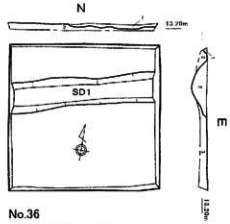
No.26

1 2.5Y7/3 浅黄色細砂質土(Feまばらに含む)
2 2.5Y7/2 灰黄色細砂質土(Feまばらに含む)
3 10YR3/1 暗黒黒褐色細砂質土(φ5cm以下わずかに含む)
4 10YR5/1 褐灰褐灰色砂質土(φ20cm以下多く含む)



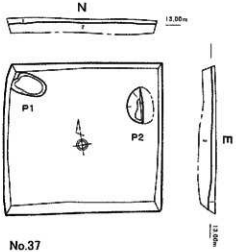
No.27

1 5Y6/2 灰オリーブ色粘細砂質土
2 10YR7/1 灰白色極細砂質土(Feわずかに含む)
3 10YR4/1 褐灰色粘細砂質土(Feわずかに含む)
4 5Y7/6 黄色粘質土



No.36

1 2.5Y6/2 灰黄色土(Feわずかに含む)
2 10YR7/2 にぶい黄橙色砂
3 5Y7/6 暗黄黄色粘質土(φ15cm以下部分的にまばらに含む)

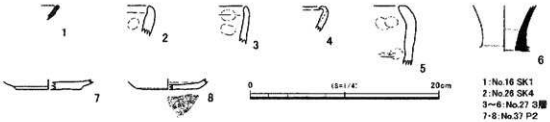


No.37

1 2.5Y7/3 浅黄色細砂質土(Feまばらに含む)
2 5Y6/1 暗灰色砂(φ20cm以下多く含む)

0 (S=1/30) 2m

調査区平面・層序図



出土遺物

【B地点】

調査地中央東よりの調査区である。No.16調査区の北東端で土坑を確認した。土坑の深さは約15cmである。遺物は土師器・瓦器が出土しており、中世前半頃と考えられる。

No.39調査区では遺構は確認していないが、中世の遺物包含層を確認している。

【C地点】

調査地南部にある南池の北側に位置する地区である。No.26～28・40調査区で遺構または遺物包含層を確認した。

No.26調査区では溝（ＳＤ１）・小穴（Ｐ３）・土坑（ＳＫ４）を確認した。ＳＤ１とＰ３・ＳＫ４の埋土は異なり、前者が白色系で後者が灰色系をなす。遺物はＳＤ１から土師器・陶磁器、Ｐ３・ＳＫ４からは製塩土器・須恵器・土師器が出土しており、前者が中・近世頃、後者が奈良・平安時代頃と思われる。

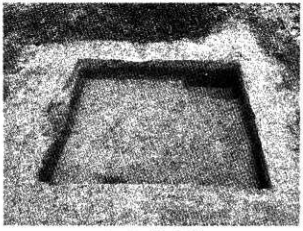
No.27調査区では耕作土下約10cmにある褐灰色粘細砂質土（３層）から須恵器・土師器・製塩土器など奈良・平安時代頃と思われる土器が比較的多く出土している。

NO.28調査区でもNo.27調査区同様耕作土下約10cmにある褐灰色粘細砂質土（３層）から奈良・平安時代頃と思われる土器が出土している。ただし、遺物量はNo.27調査区が多く、東に行くほど少なくなる傾向にある。

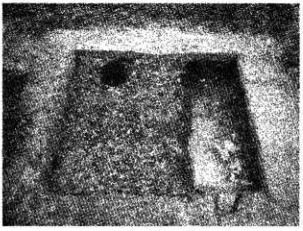
2　まとめ

本調査により、３ヶ所（Ａ～Ｃ地点）で遺構または遺物包含層を確認することができた。出土遺物からＡ地点は中世前半頃と近世頃、Ｂ地点は中世前半頃、Ｃ地点は奈良・平安時代頃と中近世頃を中心とする遺跡が想定される。

（坂口）



No.16（南より）



No.26（南より）

4　大野遺跡（おおの）　－4次調査－

所在地	賀集八幡南字池ノ内
事業名	基盤整備促進事業
担当者	坂口弘貢
種　別	本発掘調査
調査期間	平成20年7月17日～8月28日
調査面積	543.3㎡

調査の位置

1　調査内容

本調査は、賀集八幡南地区で計画中の団体営圃場整備事業に伴う調査である。

調査地は、三原平野西部の大日川支流である山路川中流右岸域、標高11.98～14.55mを測る水田からなる。調査は、工事により地下の遺跡が破壊される部分3ヶ所（1～3区）について重機・人力併用で進めていった。以下調査区の概要を記す。

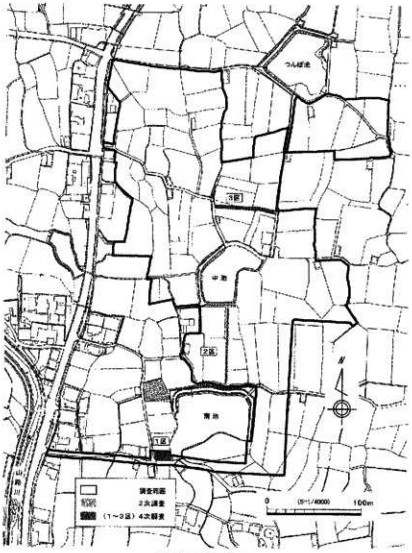
【1区】

調査地南部の南池西側に隣接する南北約6m×東西約26mの調査区である。

調査区内では顕著な遺構はなく、東（南池）方向に向かってベースの礫混明黄褐色土（9層）が下がり、谷地形を形成する（SX1）。湧水が非常に多く、礫を含んだ黒色系の土壌が堆積しており奈良時代から中世頃の遺物が出土している。また礫混暗灰色粘砂質土（8層）から円面硯の縁部が1点出土している。

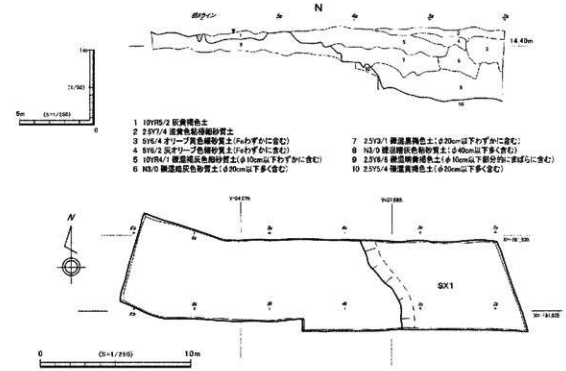
【2区】

南池から中池の間、南北約77m×東西約2.5mの調査区である。中央部付近で現在の農業用水路を挟んで2分される。

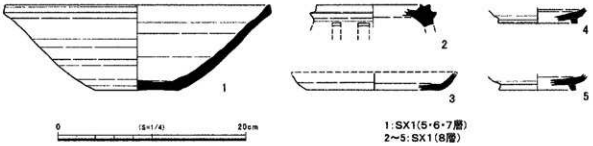


調査区設定図

調査区の南・北端は顕著な遺構はなく、中央部付近に柱穴等の遺構が分布する。その内1～2区にかけて、南北2間以上×東西1間以上の掘立柱建物が復元できる。柱間が2.1～2.2mとなり、柱



1区　平面・層序図

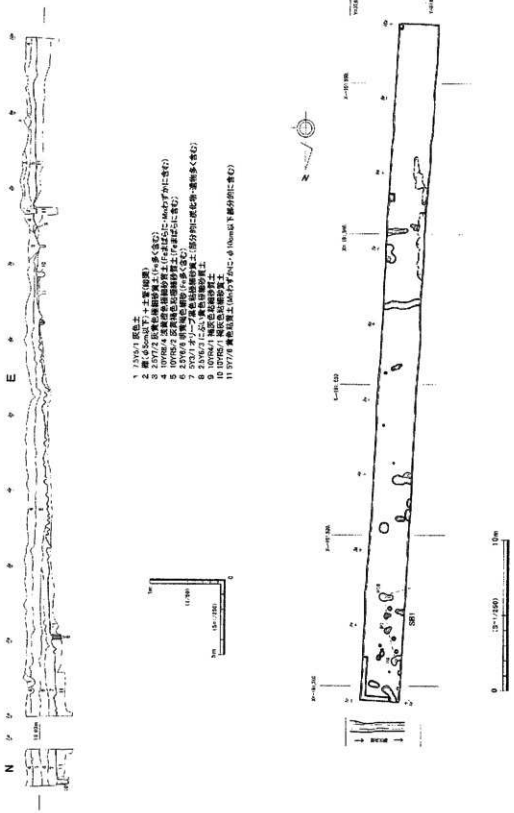


1区　出土遺物

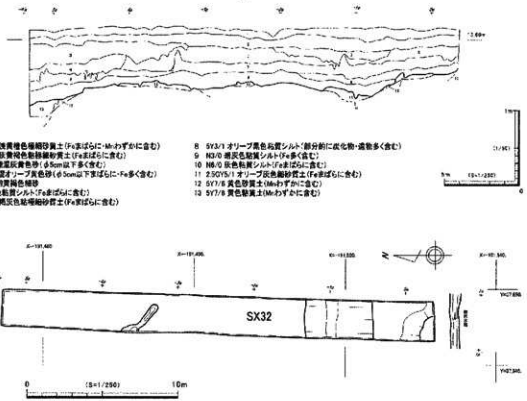
穴の平面形は楕円形で、大きいものは長辺約80cm×短辺約50cm、深さはＰ４・Ｐ16で約50cmを測る。Ｐ４には太さ約10cmの柱材が残存していた。遺物は須恵器・製塩土器などが出土しており、奈良時代の前半頃と考えられる。

遺構を確認した黄色系の粘質土は南から北に向かって緩やかに下がり、０～－１区周辺で、谷地形（ＳＸ32）を形成し、生活に直接関連する遺構は確認できなくなる。そのＳＸ32から製塩土器・須恵器などの奈良時代前半頃の遺物が多量に出土した。遺物はオリーブ黒色粘質シルト（８層）を中心にその上の褐灰色粘極細砂質土（７層）からの出土量が多いが、北方向に行くにしたがって極端に少なくなることから、建物跡周辺で使用されたものが廃棄されたと推測される。確認調査成果も合わせて見ると本地区の西側を中心に奈良時代の遺構が広がるものと思われる。

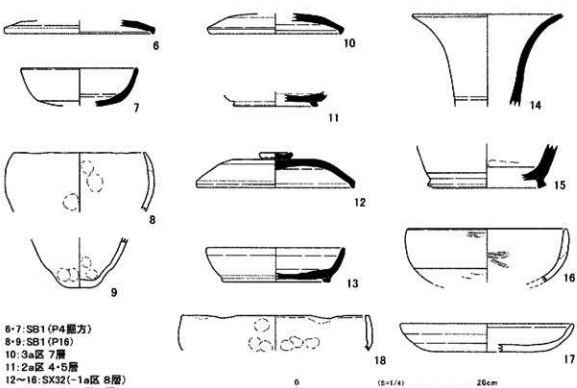
また、－２区と－４区の壁面で水田の畦畔と思われる褐灰色粘極細砂質土（７層）が約15cm盛り上がる部分を確認した。両畦畔の間隔は約10mで、上層には河川が氾濫した様な礫を含んだ細砂～砂（３・４・５層）が堆積しており、開発による削平が少なかったものと推測される。時期は奈良時代から中世頃と思われる。


N
E
1 1976/1 現表土
2 表土～Hon0層下：～土管(砂質)
3 2597/2 民家敷地部分埋土(1m多く含む)
4 1976/4 流路跡敷地部分埋土(1m近くにMnが少しに含む)
5 1976/4 流路跡敷地部分埋土(1m程度に含む)
6 2597/4 明瞭な色調(1m多く含む)
7 5970/1 オリーブ色砂質部分埋土
8 5970/1 オリーブ色砂質部分埋土：部分的に炭化物・遺物多く含む
9 1976/4 褐色系砂質部分埋土
10 1976/4 褐色系砂質部分埋土
11 1977/4 褐色系埋土(Mnが少しHCl～少しHon0以下部分的に含む)
N
N
SB1
0
1m
1:100
0
1m
1:200
0
10m
1:400

2区　平面・層序図１（南部）

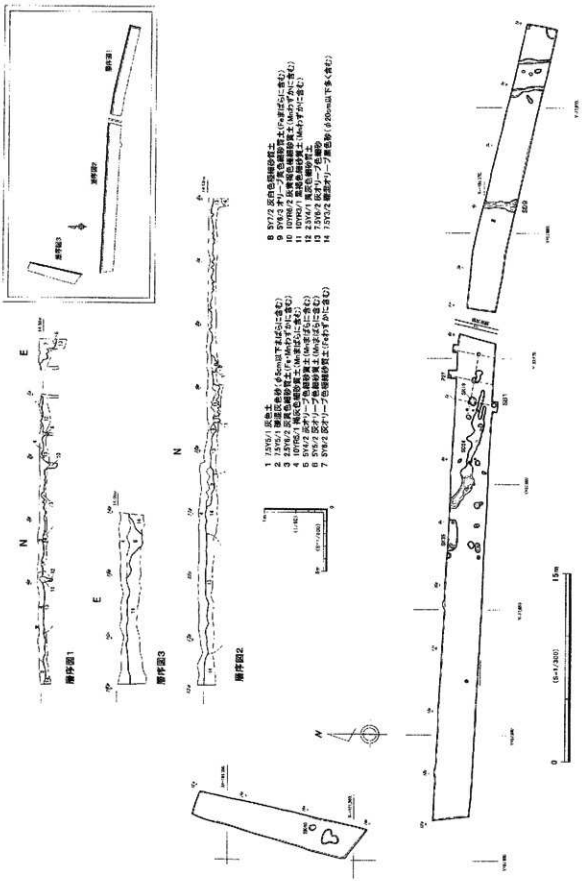


2区　平面・層序図2（北部）

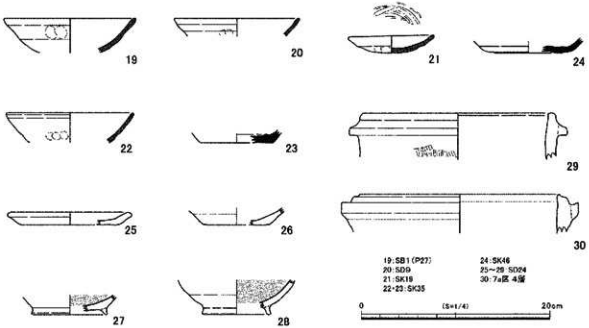


6・7：SB1（P4掘方）
8・9：SB1（P16）
10：3a区 7層
11：2a区 4・5層
12～16：SX32（-1a区 8層）
17・18：SX32（-2a区 8層）

2区　出土遺物


層序図1
層序図2
層序図3
1 2.5Y5/1 黒色土
2 2.5Y4/1 黒褐色砂(4.5mmは下は白に含む)
3 2.5Y4/2 灰褐色砂質土(1mmは下は白に含む)
4 10YR5/1 褐色粘質砂土(4mmは下は白に含む)
5 10YR5/1 褐色粘質砂土(4mmは下は白に含む)
6 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土(1mmは下は白に含む)
7 5Y4/2 灰オリーブ色砂質砂土(1mmは下は白に含む)
8 5Y7/2 灰白色砂質砂土
9 5Y6/2 オリーブ黄色砂質土(1mmは下は白に含む)
10 10YR6/1 褐灰色砂質土(1mmは下は白に含む)
11 10YR5/1 黒褐色砂質土(1mmは下は白に含む)
12 2.5Y4/1 黒褐色砂質土
13 2.5Y4/1 黒褐色砂質土
14 7.5Y3/2 暗赤オリーブ褐色砂(0.20mmは下まで白に含む)
(1:40)
(1:100)
(1:200)
0
15m

3区　平面・層序図



3区　出土遺物

【3区】

中池の北側に位置する幅2.5m～3.0mを測る逆L字状の調査区である。

ベースが細砂～礫混黒色砂となり、遺構の識別が困難となる。調査区内の遺構分布は、少ない傾向にあるが、調査区中央の6～7区周辺に柱穴状の遺構が認められる。調査区幅が狭いため、全容は把握できないが、柱穴状の遺構は2m前後の間隔で分布することから、南北2間以上×東西2間程度の掘立柱建物が想定される。また1～4区で、南北方向の溝と6～8区において東西方向の溝を確認した。溝や建物の柱穴からは、平安時代中頃と思われる土師器や須恵器・黒色土器片に混じって瓦器片が認められることから、各遺構の時期は鎌倉時代頃が想定される。

2　まとめ

本調査により、奈良時代～鎌倉時代頃の遺構・遺物を確認することができた。特に1・2区周辺（南池の北～西周辺）は、調査区が狭小なため詳細は不明であるが、奈良時代頃の遺構の分布密度がかなり高いことが想定される。さらに出土遺物の中に円面硯が含まれることから、注意を要する。

（坂口）

1区　全景（西より）

2区　（2～－6区：南東より）

3区　（6～13区：東より）

5　九蔵遺跡　－６次調査－

所在地	阿万東町字中ノカイチ外
事業名	基盤整備促進事業 市道阿万190号線道路改良事業
担当者	山崎裕司
種　別	本発掘調査
調査期間	平成20年８月１日～11月６日
調査面積	約2,452㎡

調査の位置

1　調査内容

調査地は南あわじ市の最南端、鴨路川によって形成された標高２～８ｍの低平な沖積地に位置する。鴨路川は現在、遺跡北側を北西の方向へ流れているが、昔は今回の調査地の西端付近を南西方向へ流れていたと伝えられる。調査地の北方向には弥生時代中期・平安時代～中世の北田遺跡、南東方向には古墳～平安時代のみのこし遺跡が立地する。

当遺跡は平成15年度の分布調査により存在が明らかになり、平成17年度には兵庫県教育委員会の発掘調査により、銀製の和同開珎の出土、官衙的な遺構が検出されるなど大きな成果があった。（『平成17年度　年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2007）また基盤整備促進事業に伴って行った１～５次調査の結果、縄文時代晩期～中世の複合遺跡であることが明らかになっている。（『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』2009、『同Ⅲ』2010、『同Ⅳ』2011）

平成19年度に行った確認調査（５次調査）の結果に基づき、当調査を行うことになった。またＢ－６地区では、阿万190号線道路改良事業が計画されており、事業の工程上の問題から併せて本発掘調査を行った。Ｂ－６地区については工事用の仮道路を確保する必要があるため、北西と南東に調査区を分け、時期をずらして調査を行うことになった。

【Ｂ－６北西地区】

段丘面に位置するため、南東から北西に落ち込んでいくような地形となっている。南東側の一部を除いて、中世と弥生時代～古代の２面に遺構面が分かれていた。

〔中世〕

墓59　頭骸骨や大腿骨の一部が残っており、出土状況から横向きに足を折り曲げた状態で直葬されたと推定される。頭部後方からは副葬されたと思われる完形の輸入青磁の劃花文碗（１）が出土している。

建物４　２×２間の総柱建物である。

〔古代〕

建物１　梁行２×桁行３間の側柱建物である。

建物２　未検出部分があるが、建物１と同様、梁行２×桁行３間の側柱建物で建物１と同じような方向で建てられたと思われる。建物１と時期差があるかどうかは不明である。

溝67　溝埋土中層付近で建物１柱穴が検出されており、建物１よりも古いと思われる。

〔弥生時代〕

溝84　上面で幅２ｍ前後の溝を検出し、弥生時代前期の土器が多く出土した。南から北へ流水があっ

たと思われるが、等高線に逆らうように流れていくことから自然の流路ではなく人為的に掘られた可能性が高い。流水は湧水によるものと思われる。B－6南東地区では途切れている。

【B－6南東地区】

B－6北西地区と違って段丘上に位置し、弥生時代～中世の遺構が同一面で検出された。一部の範囲でこの遺構面より下に縄文土器を含む層が確認され、掘り下げを行った結果、自然流路が検出された。

〔中世〕

建物5　梁行2×桁行2間の側柱建物と思われる。

建物6　北東・南西・北西に庇が付く。母屋部分は梁行2×桁行2間の総柱建物と思われる。

建物7　南東・南西に庇が付く。母屋部分は梁行2×桁行2間の総柱建物と思われる。

建物8　隣接して並ぶ柱穴がいくつか見られることから、同規模で建て替えが行われたと思われる。北西に庇が付く。母屋部分は梁行2×桁行2間の総柱建物と思われる。

建物9　梁行1×桁行2間の掘立柱建物である。

井戸669　平面形は円形で素掘りの井戸と思われる。上面の幅が約1.9m、深さは約0.9mである。ほぼ完形の須恵器壺（5）や瓦器椀（6・7）等が出土している。およそ12世紀後半～13世紀前半頃と思われる。

〔古代〕

建物3　梁行2×桁行3間の側柱建物である。北西地区からの延長である溝67との前後関係は不明である。

土坑608　土器だまりが形成されており、奈良時代前半頃の製塩土器等が出土した。

〔縄文時代〕

蛇行する自然流路（流路702）を検出した。流路埋土から滋賀里Ⅳ式と思われる1条の突帯を施す深鉢が数点出土している。周囲に人為的な遺構は確認できなかった。

【D－1地区】

D－2地区と共に遺跡南端で最も海に近い調査区である。西端のわずかな範囲で遺構面が2面に分かれていたが、ほぼ全面で古代と中世の遺構が同一面で検出された。

〔中世〕

建物1a・1b　ほぼ同規模で建て替えが行われたと判断されるが、順序は不明である。周囲に庇が付く母屋部分梁行2×梁行3間の総柱建物と思われる。柱穴から13世紀代と思われる遺物が出土している。

〔古代〕

建物2　梁行2×桁行4間（約4.8×7.8m）の側柱建物である。柱穴から坏H身と思われる28や丸底Ⅲ式と思われる製塩土器等が出土しており、飛鳥時代の建物と考えられるが、柱穴158上層からは古墳時代後期の銅芯銀張の耳環（27）が出土している。

建物3　梁行1×桁行2間の側柱建物と思われる。

建物4　梁行2×桁行3間の側柱建物である。

建物5　梁行1×桁行3件の側柱建物である。柱穴から坏H蓋と思われる30や丸底Ⅲ式と思われる製塩土器片が出土しており、飛鳥時代の建物と考えられる。

建物6　梁行2×桁行2間の側柱建物である。

【D－２地区】

D－１地区と比べて検出遺構は少なく、復元できた建物も小規模である。出土遺物も少量で小片化したものが多い。

〔中世〕

柵列１・２　D－１地区建物１とほぼ同方位である。

〔古代〕

建物７　梁行１×桁行２間でD－１地区建物２・３とほぼ同方位である。

建物８　梁行２×桁行３間でD－１地区建物４・５とほぼ同方位である。

２　まとめ

縄文時代晩期の流路出土土器は比較的磨耗が少ないことから周辺に集落が展開していた可能性が高い。九蔵遺跡２次調査では滋賀里Ⅲｂ式の土器が土坑から出土しており、弥生時代前期との間を埋める資料を得ることができた。

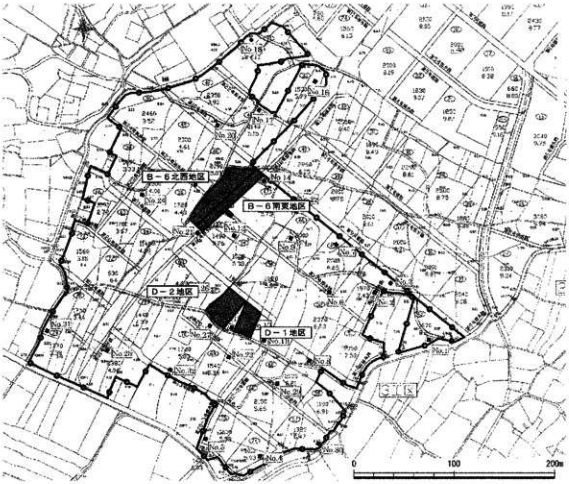
九蔵遺跡３次調査および県教委の調査で弥生時代前期頃の溝が検出され、環濠と推定されている。今回検出した溝84は幅や深さはほぼ同じであるが、平面・断面共に形状が不規則で、しかも途切れていることから、同じ環濠の一部とは考え難い。ただし溝より西側には集落が広がらないことから、この溝が集落の内外を隔てる役割を果たしていたことは間違いないと思われる。

当調査で復元できた古代の個々の建物について、今後詳細な時期の検討を行う必要があるが、現在わかっている点について整理しておきたい。同じような方位を示すものを分類すると、①B－６地区建物３、D－１地区建物２・３、D－２地区建物７②D－１地区建物４・５、D－２地区建物８③B－６地区建物１・２の３通りとなり、このうち①のD－１地区建物２と②のD－１地区建物５は柱穴出土遺物から飛鳥時代と思われる。またB－６地区周辺は土坑608の出土遺物などから奈良時代前半頃が中心であったと推定され、③のB－６地区建物１・２についても奈良時代前半頃の可能性が高い。

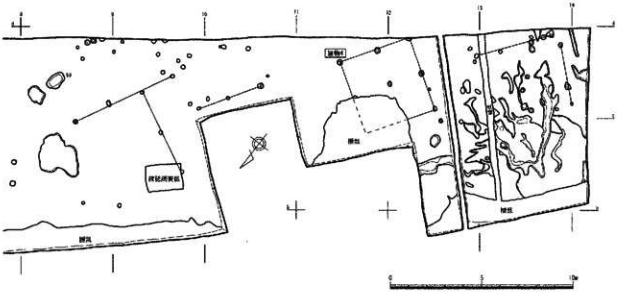
D－１地区建物２は、柱穴158から耳環が出土したことに加え、建物の平面規模や柱穴の大きさから官衙建物の可能性も考えられる。県教委調査区で検出された官衙建物は、奈良時代後半頃を中心とするもので、D－１地区建物２が官衙建物であるとすると飛鳥時代にはすでに官衙が成立していたことになり、九蔵遺跡の性格ひいては淡路島の古代史を紐解く上で非常に重要な成果となるであろう。

中世については、D－１地区の建物１は13世紀頃、B－６地区の井戸669の出土遺物が12世紀後半～13世紀前半頃、墓59も井戸669と同じような時期と思われる。中世の建物群については方位から①B－６地区建物４・５・６・９、②B－６地区建物７・８、D－１地区建物１の２群に分類できると思われる。①と②の前後関係は不明であるが、B－６地区周辺では①の建物６、②の建物７を中心として屋敷が形成されていたのではないかと思われる。これらの中心的建物の北東に井戸669、北西に墓59が分布し、墓59が屋敷墓であった可能性は極めて高いと考えられる。

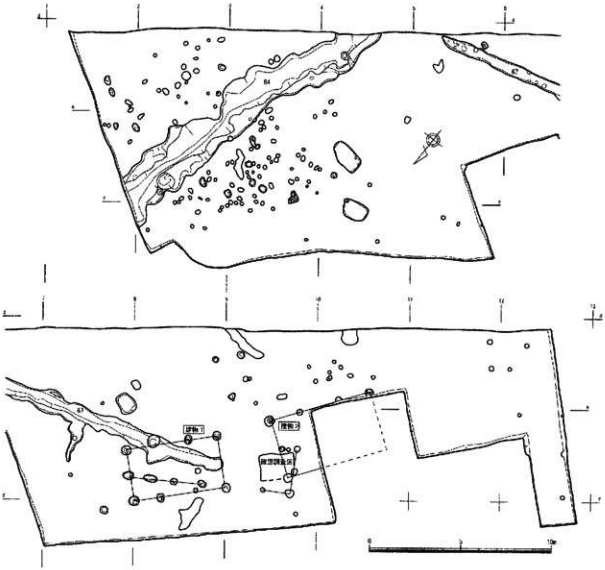
淡路島では近年まで両墓制の慣行が広く行われ、その最古の年代を示すものとして貞治３（1364）年の銘をもつ松帆西路・志知川共同三昧（埋墓）に建てられた六面石幢が存在する。今回の調査で13世紀代に屋敷墓の風習があったことが明らかになり、中世における墓制の移り変わりを考える上で非常に重要な資料を得ることができた。　（山崎）

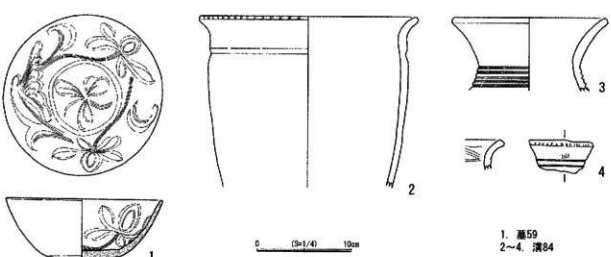


調査区設定図

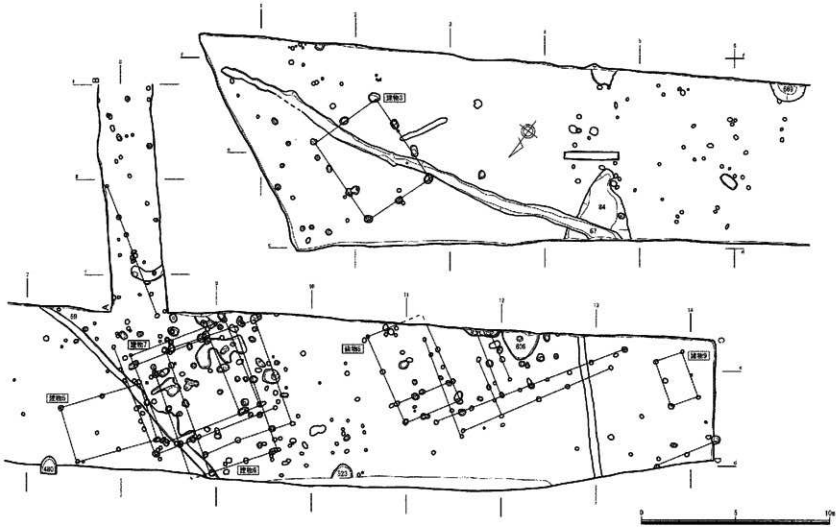


B-6北西地区　中世遺構面　平面図

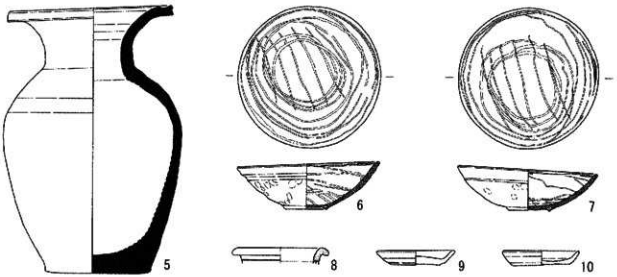




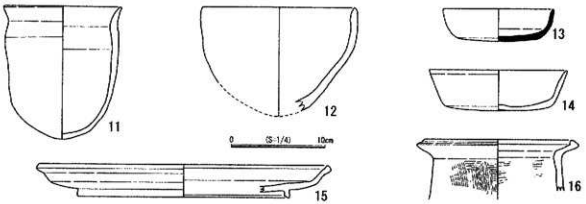
B-6北西地区　墓59・溝84　出土遺物



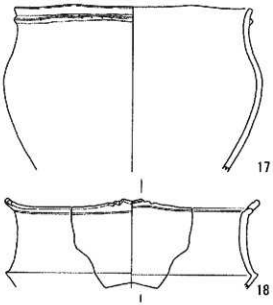
B-6南東地区　弥生時代～中世遺構面　平面図



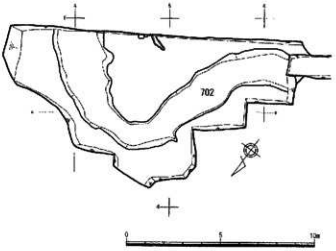
B-6南東地区　井戸669　出土遺物



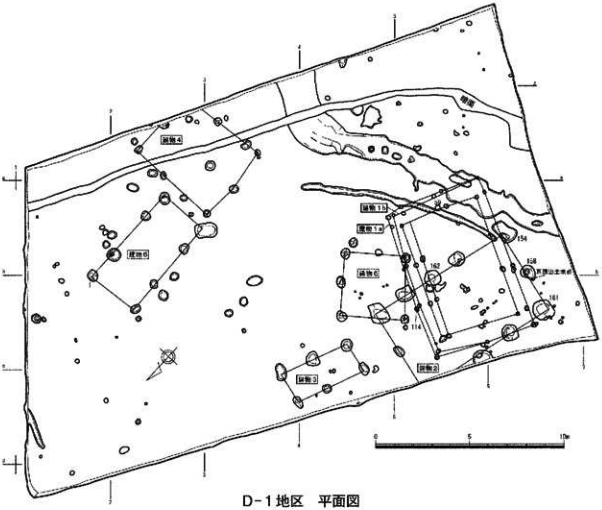
B-6南東地区　土坑608　出土遺物



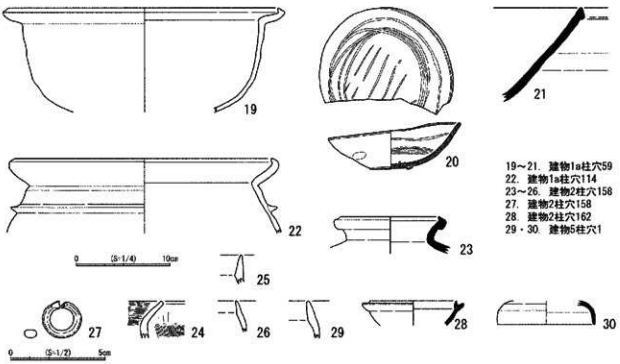
B-6南東地区　流路702　出土遺物



B-6南東地区　縄文時代遺構面　平面図

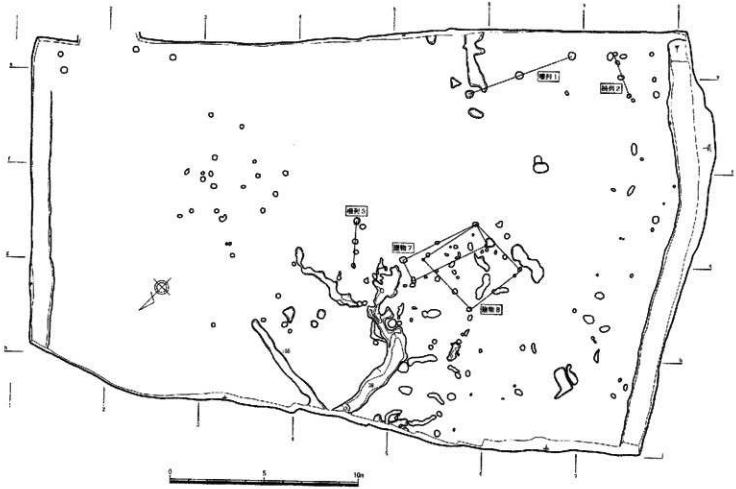


D－1地区　平面図



19～21．建物1a柱穴59
22．建物1a柱穴114
23～26．建物2柱穴158
27．建物2柱穴158
28．建物2柱穴162
29・30．建物5柱穴1

D－1地区　建物柱穴　出土遺物



D-2地区　平面図

6　佐保谷瓦窯跡　－１次調査－

所在地	八木大久保字佐尾谷
事業名	分譲住宅用地造成事業
担当者	坂口弘貢
種　別	確認調査
調査期間	平成20年８月29日～９月３日
調査面積	45.3㎡

調査の位置

1　調査内容

本調査は、八木大久保地区で計画されている分譲住宅用地の造成工事に伴う確認調査である。

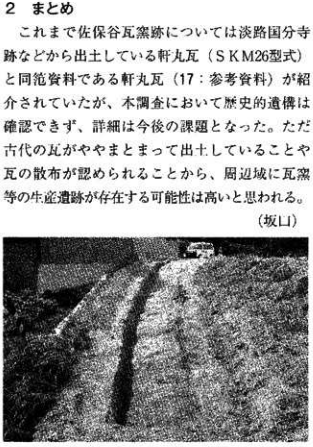
調査地は、三原平野東部の諭鶏羽山から北方向に伸びる標高90m前後の舌状丘陵東側斜面付近に位置する。調査は、幅約1.2～1.5m×長さ約33mの調査区を設定し、重機・人力併用で進めていった。

調査の結果、２区より南は、厚さ約10～20cmの攪乱状の土壌下がすぐ岩盤となる。一方、３～５区にかけては、西側の山を削って盛土をして林道状の通路（ＳＸ１）としていることがわかった。その盛土の中には、古代の瓦片に混じって近世以降の遺物が多く出土しており、近世以降に削平を受けたものと推測される。また、窯跡等歴史的な遺構は確認することができなかった。

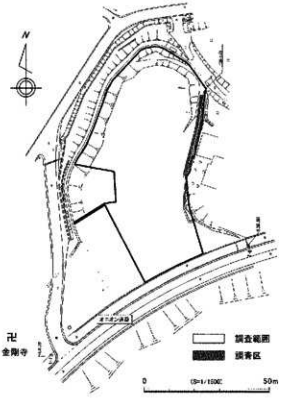
2　まとめ

これまで佐保谷瓦窯跡については淡路国分寺跡などから出土している軒丸瓦（ＳＫＭ26型式）と同笵資料である軒丸瓦（17：参考資料）が紹介されていたが、本調査において歴史的遺構は確認できず、詳細は今後の課題となった。ただ古代の瓦がややまとまって出土していることや瓦の散布が認められることから、周辺城に瓦窯等の生産遺跡が存在する可能性は高いと思われる。

（坂口）

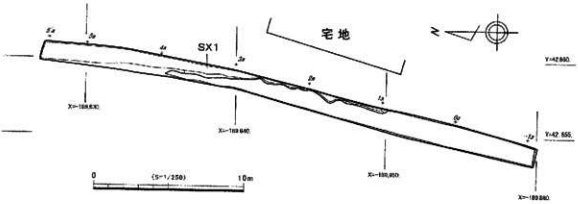


調査区全景（３～５区：北より）

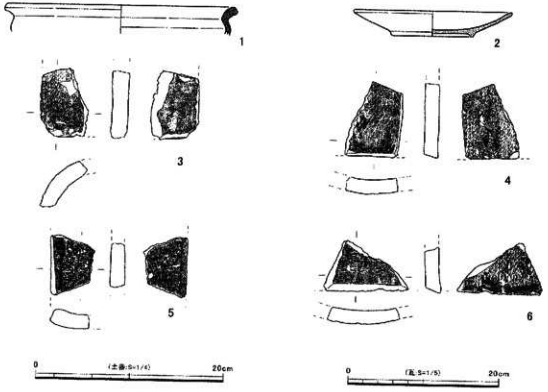


調査区設定図

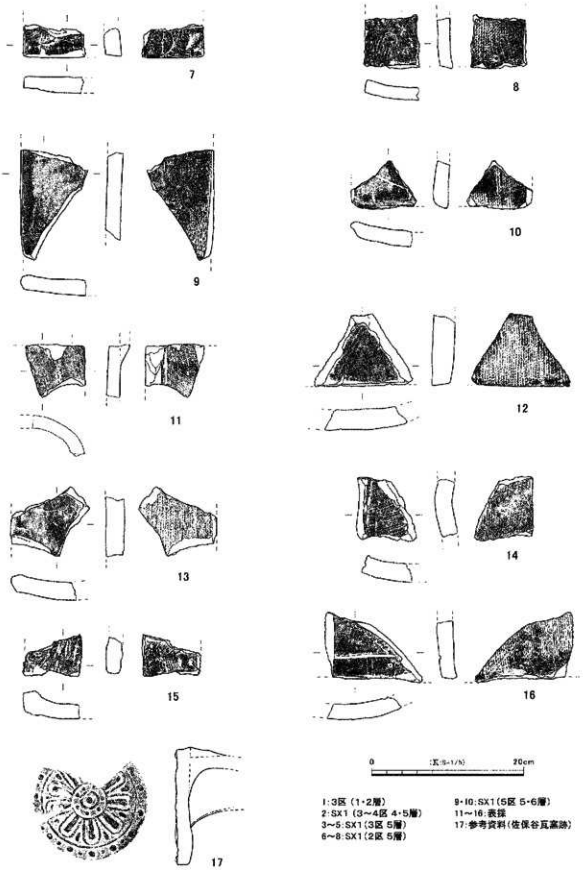
*層序図の高さは、工事で設置された任意の水準点であるため、実際の高さとは誤差がある。



調査区平面・層序図



出土遺物1


7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
0
(縮尺1/3)
20cm
1:3区（1・2層）
2:SX1（3～4区 4・5層）
3～5:SX1（3区 5層）
6～8:SX1（2区 5層）
9・10:SX1（5区 5・6層）
11～16:表採
17:参考資料（佐保谷瓦窯跡）

出土遺物２

7　大野遺跡　－５次調査－

所在地	賀集八幡南字梅原外
事業名	基盤整備促進事業
担当者	坂口弘貢
種　別	確認調査
調査期間	平成20年９月22日～11月７日
調査面積	268㎡（66ヶ所）

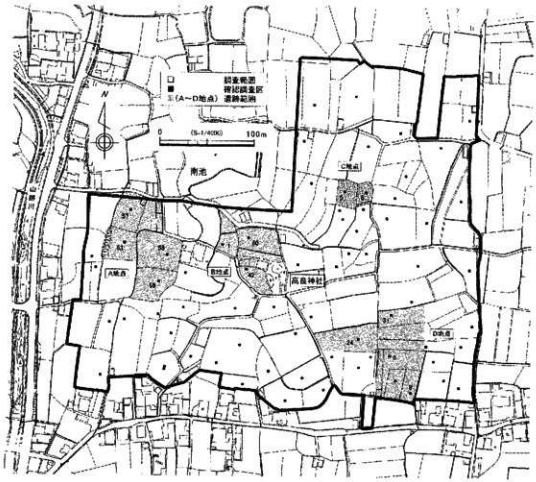
調査の位置

1　調査内容

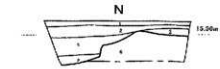
本調査は、賀集八幡南地区で計画中の団体営圃場整備事業に伴う確認調査である。

調査地は、三原平野西部の大日川支流である山路川中流右岸域、標高14.33～19.28mを測る水田からなる。

調査は、工事予定範囲内に２×２mの調査区を65ヶ所と２×４mの調査区を１ヶ所設定し、重機・人力併用で進めていった。地形的には、大きく見て南東から北西方向に向かって傾斜しており、調査成果と合わせて見ると、微高地と谷地形が交互に繰り返すような状況で、微高地部分の４地点（A～D地点）で遺構などの文化財を確認することができた。遺構を確認した微高地部分では耕作土下

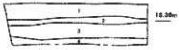


調査区設定図



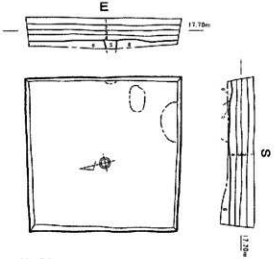
No.6

1 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質細砂質土(Fe多く含む)
2 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土(Fe多く含む)
3 10YR4/1 褐灰色細砂質土
4 N5/0 灰色細砂質土
5 N4/0 灰色粘細砂質土
6 10YR6/6 明黄褐色粘質土



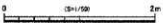
No.9

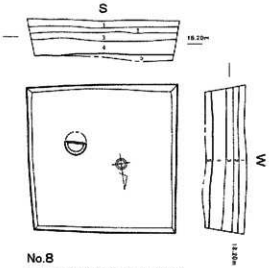
1 7.5Y5/1 灰色細砂質土
2 7.5Y6/1 灰色細砂質土
3 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土
4 5Y6/3 オリーブ黄色シルト質粘土(Feわずかに含む、湧水あり)



No.24

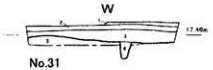
1 10YR7/2 にぶい黄橙色極細砂質土(Feわずかに含む)
2 10YR7/3 にぶい黄橙色極細砂質土(Feまばらに含む)
3 10YR5/1 褐灰色粘極細砂質土
4 10YR4/1 褐灰色粘極細砂質土
5 5Y4/1 灰色粘極細砂質土
6 10YR7/6 明黄褐色粘細砂質土(φ5cmは下まばらに含む)





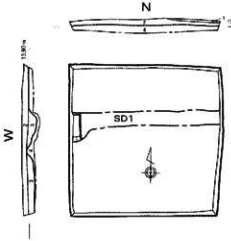
No.8

1 10YR6/1 褐灰色細砂質土(Feまばらに含む)
2 10YR7/2 にぶい黄橙色極細砂質土
3 10YR5/2 灰黄褐色極細砂質土(Mnまばらに含む)
4 10YR4/2 灰黄褐色粘質細砂質土
5 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土



No.31

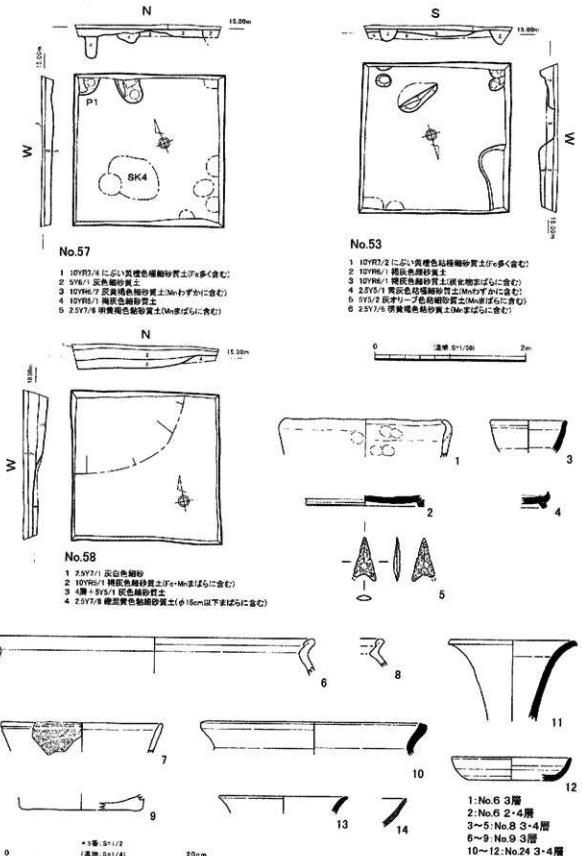
1 10YR6/1 褐灰色極細砂質土(Feわずかに含む)
2 2.5Y7/4 淡黄色極細砂質土(Fe・Mnまばらに含む)
3 10YR4/1 褐灰色粘極細砂質土
4 10YR5/1 褐灰色極細砂質土
5 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土



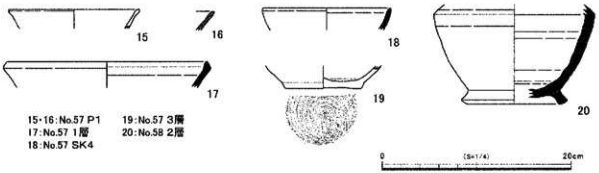
No.42

1 10YR7/2 にぶい黄橙色極細砂質土(Feわずかに含む)
2 10YR4/1 褐灰色極細砂質土(Mnまばらに含む)
3 2.5Y6/2 灰黄色極細砂質土
4 5Y7/8 黄色粘質土

調査区平面・層序図1



調査区平面・層序図2・出土遺物1



出土遺物

20cmまでにベースを確認する調査区が多いが、谷地形内に設定した調査区では非常に軟弱な砂質又はシルト系の土壌が堆積して湧水も非常に多い。

以下遺構を確認した各地点の概要を記す。

【A地点】

調査地の西部に位置する地点で、今回の調査の中で最も遺構分布密度が高い。No.53・57・58調査区などで柱穴と思われる遺構などを確認した。ただし、ベースが砂質系であるため、遺構のプランや深度が理解しにくい部分が多い。部分的に遺構の掘削を行った結果、瓦器を含む遺構が多いことから、中世前半頃の遺構が中心となるものと推定されるが、出土遺物には奈良時代頃の遺物も一定量認められることや周辺の調査成果から、同時代の遺構も存在する可能性は非常に高い。

【B地点】

調査地中央にある高良（大野）神社西から北側の地点である。No.1調査区で遺物包含層、No.42調査区で幅約20～40cm×深さ約15cmの東西方向に伸びる溝を確認した。出土遺物はないが、周辺の状況から奈良時代又は中世頃が想定される。相対的に本地点は遺構分布・遺物の出土量共に少ない傾向にある。

【C地点】

調査地の中央北よりに位置する。No.6調査区の褐灰色細砂質土（3層）を中心に奈良時代頃の製塩土器などの遺物が出土した。また北壁・西壁面で同時代と思われる土坑状の遺構を確認した。遺跡範囲としては、No.6調査区を中心に比較的狭い範囲を想定する。

【D地点】

調査地南東部に位置する。No.8・24・31調査区で奈良時代頃を中心とする遺物包含層や小穴を確認した。遺物量はNo.8調査区を中心に周辺の調査区が少なくなる傾向が認められる。またNo.9調査区は谷地形内にあたり、湧水が激しい軟弱な土壌が堆積する。その内黒褐色シルト質粘土層（3層）を中心に、縄文時代晩期と思われる遺物が出土している。

2　まとめ

以上本調査によって、微高地部分を中心に縄文時代晩期・奈良時代・中世頃の遺構・遺物を確認することができた。（坂口）

8　井手田遺跡　－1次調査－

所在地	阿万上町字井手田外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	山崎裕司
種　別	確認調査
調査期間	平成20年10月15日～11月6日
調査面積	約408㎡（102ヶ所）

調査の位置

1　調査内容

調査地は南あわじ市の南端、塩屋川によって形成された標高1～14mの低平な沖積地から扇状地末端に位置する。調査地北東には中世の山城と伝えられる郷殿城跡、東方向には弥生時代・中世の河内遺跡、北西方向には平安時代末と伝えられる塩屋古城跡や弥生～平安時代の初田遺跡などが分布する。また南西方向には条里型地割の名残と思われる土地区画が見られる。

平成16年度の当事業に伴う分布調査により道跡（旧名は名小路遺跡）の存在が明らかになり、平成18年度には兵庫県教育委員会によって主要地方道洲本灘賀集線（阿万バイパス）道路改良事業に伴う確認・本発掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになった。

No.12・14・25・26・36・40・41・42・47・49・78・82・89・92・99の各調査区で埋蔵文化財の包蔵を確認した。

No.12　5層がNo.14の5層と対応すると思われる。ただし出土遺物はNo.14と比べて非常に少なく、小片化が進んでいることから、基本的には流れ込みで堆積したと思われる。

No.14　1～16は5層を中心に下層部から出土した弥生時代終末期～古墳時代前期頃の土器群である。残りの良いものが比較的多く、手づくね土器（2～4）・小型丸底土器（8）・器台（9）等、祭祀関係と思われるような土器が多く含まれている。

No.25　流路状の遺構を検出した。17～26は遺構から、27～33は4・5層から出土した。須恵器は出土しておらず、古墳時代前期の範疇と思われるが、No.14・92出土土器より新しい様相を呈する。また遺構から手づくね土器（25）が出土していることから、祭祀関係の遺構である可能性も考えられる。

No.26　南東壁で遺構と思われる落ち込み（5層）を確認した。

No.36　湧水が極めて激しく、6層以下の掘削は困難であった。6層からは律令期の坏蓋片と思われる34が出土している。

No.40　4層を中心に弥生時代～中世の土器が少量出土している。35は底部回転糸切の土師器皿で、詳細な時期は不明であるが中世と思われる。

No.41　3層上面で遺構面を確認した。遺構埋土は2層とほぼ同じ土質である。出土遺物が少なく、時期は不明である。

No.42　北壁で遺構状の落ち込み（2層）を確認した。詳細な時期は不明であるが、埋土から中世以降と思われる。36・37は3層からの出土で、弥生時代中期頃と思われる。ただし磨耗が激しく、地形的に高い東方向からの流れ込みと思われる。

No.47　南西壁で遺構状の落ち込み（4層）を確認した。詳細な時期は不明であるが、埋土から中

世以降と思われる。

No.49　柱穴と思われる遺構を検出した。律令期の坏身あるいは坏蓋と思われる須恵器片が、遺構1埋土（38）と2層（39）から出土した。2層からは他に丸底Ⅳ式と思われる製塩土器の口縁部（40）、中世と思われる羽釜（41）等が出土している。

No.78　床土直下が遺構面となっており、耕地開発の影響を受けている可能性が高い。遺構1から中世の須恵器壺（42）が出土している。調査区に隣接して『郷殿大人墓』、また北50m程に『郷殿御子墓』と記された石碑が建てられている。ただし石碑自体は御影石でつくられた非常に新しいものである。

No.82　4・6層上面が遺構面と判断される。ただし3～6層は同じような土色であり、7層上面でなければ平面検出は難しいと思われる。遺構2からは白磁碗（43）、蓮弁文の青磁碗（44）、河内・和泉型と思われる瓦質羽釜（45）等が出土しており14～15世紀頃ではないかと考えられる。

No.89　46～49は3層からの出土で、弥生時代前期頃と思われる。

No.92　4層は大きな礫を含み、塩屋川の旧河道内に位置する可能性が高い。また4層以下は非常に湧水が激しく、掘削が困難であった。4層のやや窪んだ場所に土器だまりが形成されており、弥生時代終末期～古墳時代前期頃と思われる50～55が出土した。

No.99　3・4層に弥生時代前期頃と思われる土器片が少量含まれる。

2　まとめ

埋蔵文化財を確認した調査区を中心に、遺跡の時代や地形を考慮してA～E地区に分けた。A地区については先述の県教委の成果も参考にすることができる。

地形から大きく分類すると、A・B地区は三角州、Cは自然堤防上、D・E地区は旧本庄川により形成された小規模な扇状地の末端付近に立地すると推定される。地元での聞き取りによると、旧本庄川はE地区の北端付近を西方向へ流れていたとされ、この川筋を埋めて耕地化を行ったらしい。この時期は不明であるが、近世～近代のことであろうと思われる。したがってそれ以前は旧本庄川が旧塩屋川に流れ込んでおり、本庄川の川筋には大きな改変が行われている。またA地区は中州状の地形で、地区北東端で旧塩屋川が分流し、また奈良時代前後にこの旧河道が埋没していくことが県教委の調査からわかっている。A・B地区の南西方向に広がる条里型地割の施工時期については不明ながら、旧河道の埋没と西方向への流路変更により施工が可能になったと推定される。A地区の東側については旧河道に加えて、扇状地末端の湧水地点（出湧）が分布し、低湿地が広がっていることも今回の調査で明らかになった。

次に各地区の時期について述べる。A地区南西部のNo.36・89・99周辺は弥生時代前期頃が中心であるが、律令期の遺構も検出される可能性がある。A地区北東部は県教委の調査によって弥生時代中期には墓域として利用され、古墳時代以降は居住域として利用されていったことがわかっており、特に古墳・奈良・鎌倉時代の住居跡が多く検出されている。No.92は塩屋川の旧河道内に位置すると思われ、弥生時代終末期～古墳時代前期頃の土器だまりが形成されていた。この調査区より東側に中州が広がっていたと思われる。中州の中心付近に位置すると思われるNo.25からは祭祀関係の可能性がある流路状の遺構が検出された。出土遺物は古墳時代前期頃で、No.14・92より新しい時期と思われる。

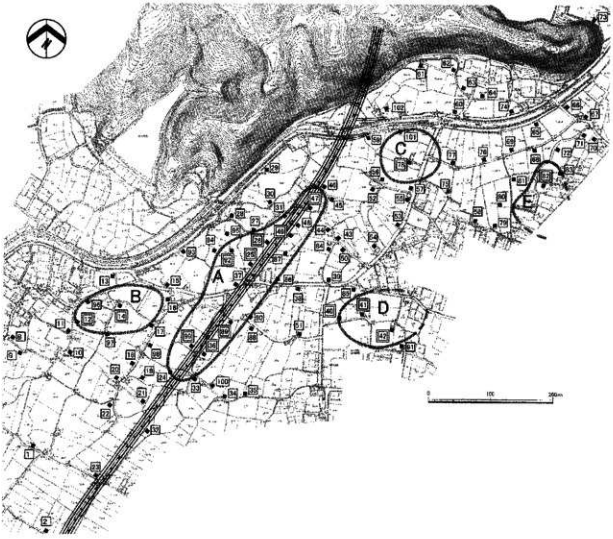
B地区のNo.14からは弥生時代終末～古墳時代前期頃の土器が多く出土し、手づくね土器等が含

まれていることから、周辺で何らかの祭祀が行われた可能性が考えられる。No.92と違って粘土質の上層が厚く堆積していることから、旧河道内でも流れのほとんどない場所か低湿地状の場所であったと思われる。

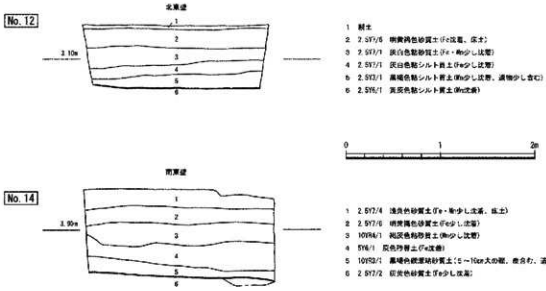
C地区はNo.78の調査成果から中世の比較的短期間に居住域として利用されていたようである。また郷殿夫人・御子の石碑が存在し、対岸の山頂には室町時代と伝えられる郷殿城跡が立地することから、郷殿関連の施設等が検出される可能性もある。C地区の対岸の調査範囲については氾濫原であることがわかり、城跡以外の遺跡は分布しないことが明らかとなった。

D地区のNo.40～42については流れ込みの出土遺物がほとんどであるため詳細な時期は不明であるが、中世の遺構が分布するようである。また地区の東方向に弥生時代中期の遺跡が分布する可能性がある。

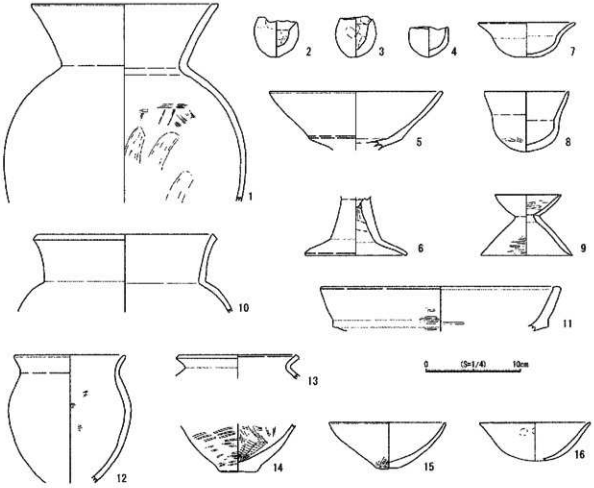
E地区のNo.82からは14世紀前後の遺構が確認された。D・E地区の中間地点やや東寄りには亀岡八幡神社が存在し、中世においては岩清水八幡宮領である阿万庄の中心的役割を果たしていたようである。したがって中世以後、亀岡八幡神社を中心としてその周囲に遺跡が分布したことは確実で、D・E地区はその遺跡範囲の周縁部に位置すると推定される。 (山崎)



調査区設定図

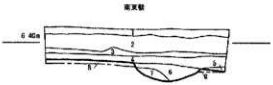


No.12・14　層序図

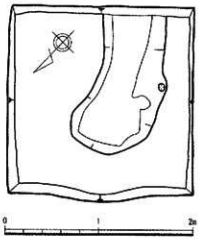


No.14下層　出土遺物

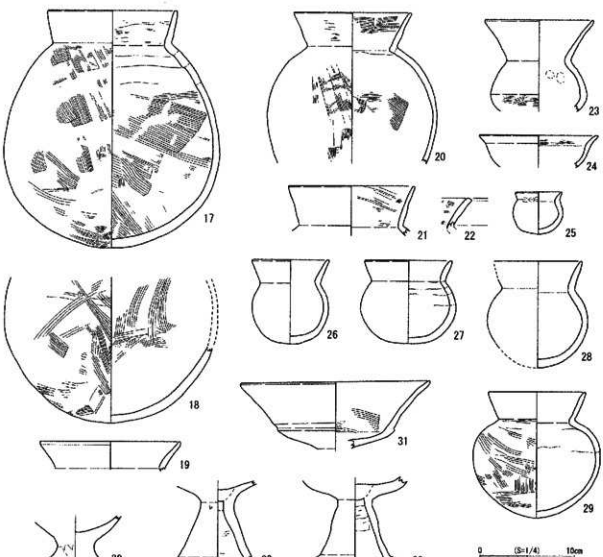
No.25



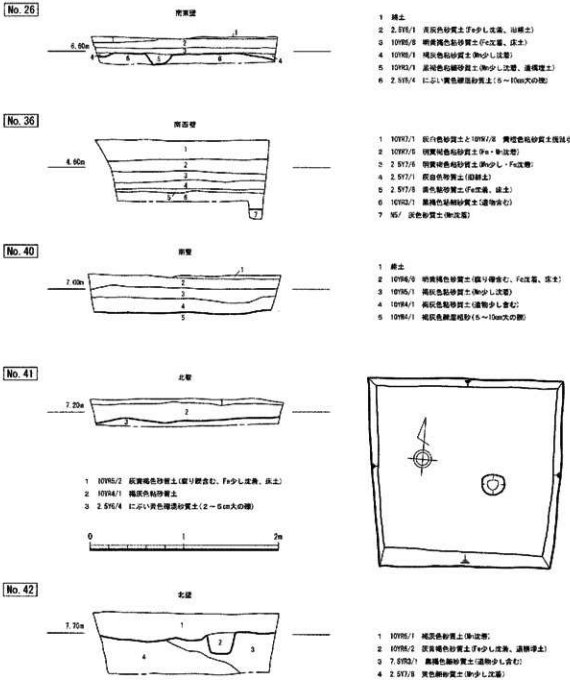
1 10YR6/5 明黄褐色砂質土(Fe沈着、炭土)
2 2.5YR/1 黒褐色砂質土(Fe・Mn少し沈殿)
3 10YR6/8 明黄褐色砂質土(Fe沈殿)
4 10YR6/1 褐灰色粘砂質土(Mn少し沈殿)
5 4と6混じる
6 10YR3/1 黒褐色粘細砂質土(遺物埋土)
7 10YR5/1 暗灰色粘砂質土(Fe少し・Mn沈着、遺構埋土)
8 2.5YR/6 明黄褐色砂質土(Fe・Mn沈殿)



No.25 層序・平面図



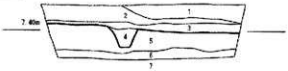
No.25 出土遺物



No.26・36・40・41・42　層序・平面図

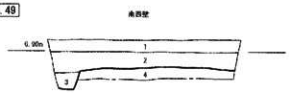
No.36・40・42　出土遺物

No. 47

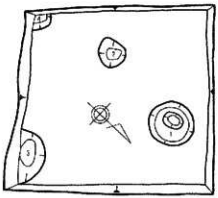


1 撹乱
2 10YR2/1 黒(白色砂質土(粗)少し含む、田植土)
3 10YR6/6 明黄褐色砂質土(粗)少し砂少し含む、Fe・Mn少し沈着)
4 10YR7/1 灰白～6/1 褐灰色砂質土(Mn少し沈着)
5 10YR4/1 褐灰色細砂質土(Mn少し沈着、遺物少し含む)
6 5と7重じる
7 2.5Y7/6 黄色砂質土(Mn少し沈着)

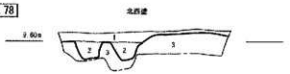
No. 49



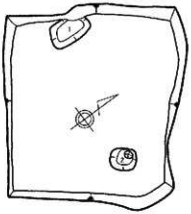
1 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土(Fe少し沈着、床土)
2 10YR4/1 褐灰色粘砂質土(Mn沈着、遺物少し含む)
3 10YR4/1 褐灰～3/1 黒褐色粘砂質土(Mn沈着、遺物埋土)
4 10YR6/6 明黄褐色細粗砂質土(2～5cm大の礫)



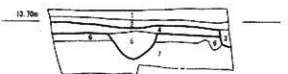
No. 78



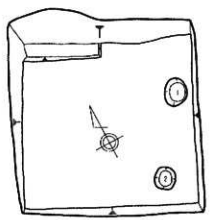
1 2.5Y6/1 黄灰色砂質土(Fe少し沈着、床土)
2 10YR4/1 褐灰～3/1 黒褐色砂質土(遺構埋土)
3 2.5Y7/6 明黄褐色細粗砂(5～10cm大の礫)



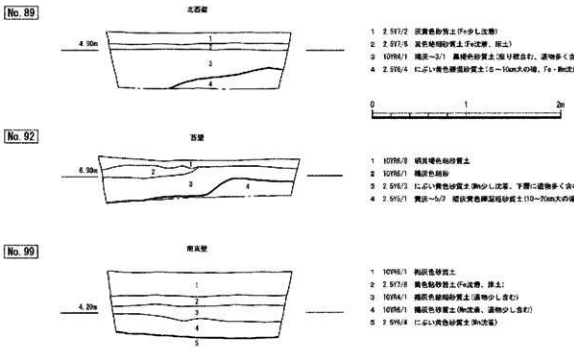
No. 82



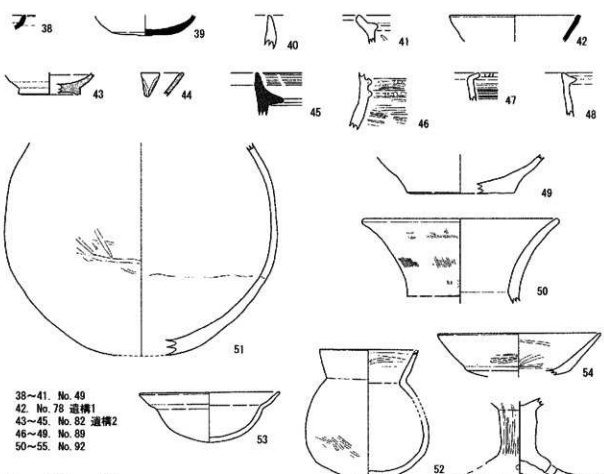
1 5Y7/1～7/2 灰白色粘砂質土(Mn・Fe少し沈着、撹乱状)
2 10YR6/6 明黄褐色砂質土(Fe沈着)
3 10YR6/2 灰黄褐色粘砂質土(Mn少し沈着、炭・焼土含む、遺構埋土)
4 10YR6/1 褐灰色細砂質土(炭・焼土含む)
5 2.5Y6/1 黄灰色砂質土(Mn沈着、炭・焼土多く含む、遺構埋土)
6 2.5Y7/1 灰白色砂質土(Mn沈着)
7 10YR3/1 黒褐色粘細砂質土(Mn少し沈着、炭・遺物少し含む)
8 10YR5/8 明黄褐色細砂質土(Fe沈着)



No.47・49・78・82 層序・平面図



No.89・92・99　層序図



No.49・78・82・89・92　出土遺物

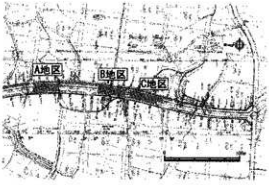
9　木戸原（きどはら）遺跡　－8次調査－

所在地	南あわじ市市新字平田ノ前外
事業名	市道徳長中島線道路改良事業
担当者	的崎薫・定松佳重
種別	本発掘調査
調査期間	平成20年10月27日～ 平成21年1月29日
調査面積	945.07㎡

遺跡の位置

1　調査内容

事業対象地は、平成17・18年度に行った圃場整備事業に伴う調査によって確認された弥生・古墳・律令期・鎌倉・室町時代の遺跡である木戸原遺跡の範囲内にあり、遺跡の境界部分にあたる。よって調査は事業対象地全域ではなく、平成17年度に行った対象地の東側に並行している排水路部分（1区）の本発掘調査成果を踏まえて部分的に行った。



調査区設定図

〔A地区〕

324.40㎡を調査し、主に東西に走る溝や土坑を確認した。遺構に切りあいがあることから、時期差はあるが古墳時代前期の範疇と考えられる。包含層からは古代の須恵器や土師器が出土している。

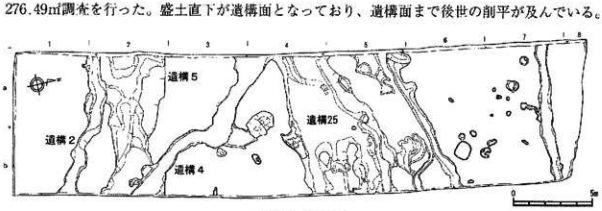
遺構2・5　遺構2が遺構5を切っている。遺構2からは小型丸底壺などが出土している。

遺構4　幅0.7～2.0m、深さ約0.35mの北西方向に走る溝で大きな蛇行がみられるため、自然流路の可能性が高い。東端部では遺構5を切り、西端部では調査区外で遺構25に合流もしくは切りあう。遺構から弥生土器や土師器の他にサヌカイト製の石刃やチャート製の凹基式石鏃が出土している。

遺構25　幅3.0～6.0m、深さ約0.35mを測る。土師器が出土し、四国地方から搬入された甕も含まれる。

〔B地区〕

276.49㎡調査を行った。盛土直下が遺構面となっており、遺構面まで後世の削平が及んでいる。



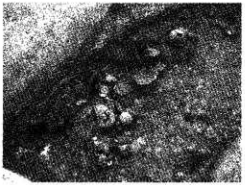
A地区　平面図

遺構１　南半部に大きく広がる遺構である。上層は黒褐色粘質土で覆われているが、中～下層にかけては地山と似た黄色系粘土が複雑に混じっている。底は平坦ではなく、遺構の性格は不明である。中～下層からは古墳時代前期の土器が出土し、南東部のやや深くくぼんだところから完形に近い甕が３個体まとまって出土している。

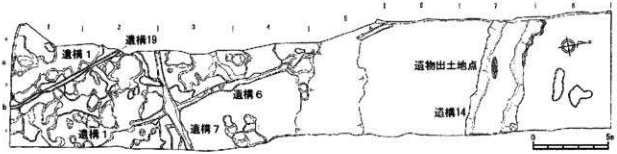
遺構６・19　この２つの遺構は遺構１の上層掘削後に検出した幅の狭い溝で、南東から北西方向に平行して走る。遺構６の南東部はこの地区では不明瞭であったが、１区から続いている。遺物は土師器が僅かに出土している。

遺構７　遺構６と垂直に交差する溝で遺構６を切っている。遺物は土師器が僅かに出土している。

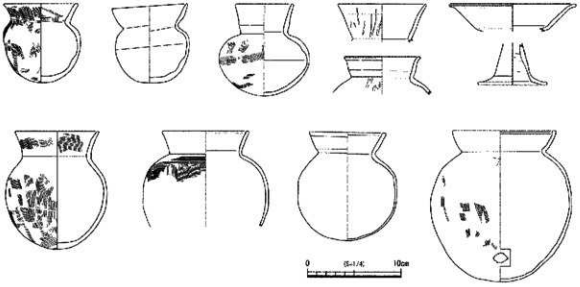
遺構14　幅約3.0m、深さ約0.6mの東西に走る溝で、上層では庄内式併行期の四国系と思われる二重口縁壺の口縁部が出土した。下層では布留式併行期の土器が一括して出土し、中には淡路では珍しい搬入品の布留式土器甕が含まれていた。また、南あわじ市では出土例が少ない製塩土器の脚台Ⅲ式もみられた。下層より古い遺物が上層から出土しているので、おそらく上層の遺物は流れ込



B地区　遺構14　遺物出土状態



B地区　平面図



B地区　遺構14　出土遺物実測図

みと思われる。

〔C地区〕

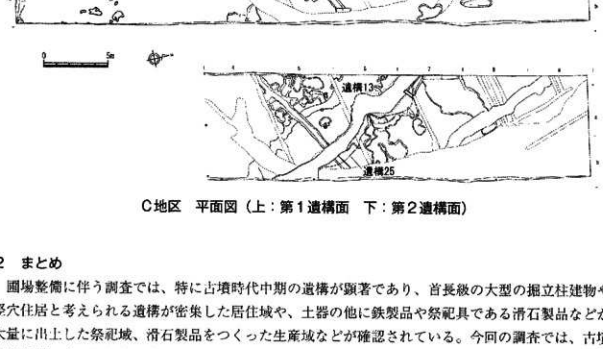
344.18㎡を調査した。1区の調査でも多く確認された現代の暗渠が続いている。同一面での検出であるが遺構の切りあいが多いため、第1面と第2面に分けた。

遺構11　幅約0.5mの東西方向に走る溝で、上層は遺構13など他の遺構を切っている。下層は遺構13などに切られている。出土遺物は少なく、土師器のみである。

遺構20　南から北に流れる溝で、幅は1.0m前後である。下層の細砂から遺物が僅かに出土し、須恵器片が含まれている。遺構から須恵器が出土したのはこの遺構だけであり、今回の調査の中では比較的新しい遺構といえる。

遺構13　幅約0.8～1.7mの北西方向に流れる溝で蛇行している。土師器の他に中～下層から弥生時代Ⅲ様式の壺の頸部～底部が出土した。肩部は刺突文や櫛描文が施文され、頸部は突帯文で飾られている。Ⅲ様式の出土は木戸原遺跡では初めてである。

遺構25　遺構上層埋土が地山と酷似していたため検出が不可能であり、底のラインのみ一点破線で示している。遺構13の北東側に沿う溝状の遺構で、遺構13に切られている。遺物はほとんど出土していない。



C地区　平面図（上：第1遺構面　下：第2遺構面）

2　まとめ

圃場整備に伴う調査では、特に古墳時代中期の遺構が顕著であり、首長級の大型の掘立柱建物や竪穴住居と考えられる遺構が密集した居住域や、土器の他に鉄製品や祭祀具である滑石製品などが大量に出土した祭祀域、滑石製品をつくった生産域などが確認されている。今回の調査では、古墳時代前期のものが中心であったが、どの調査区からも溝や性格不明の土坑ばかりで竪穴住居や柱穴など居住域を示す遺構は確認できず、今までの調査成果同様に遺跡の中心部から離れた縁辺部と言える。僅かではあるが弥生時代Ⅲ様式の土器も確認でき、これによって周辺にはこの時期の集落が存在することを示唆している。よって、木戸原遺跡は立地条件が良いことから、弥生時代中期頃から集落が営まれ始め、盛衰を繰り返しながら現代まで続いてきたと推測される。　（的崎・定松）

10　淡路国分寺跡（あわじこくぶんじ）　－18次調査－

所在地	八木国分字寺内
事業名	国分寺浄化槽設置事業
担当者	坂口弘貢
種　別	本発掘調査
調査期間	平成20年11月10日～27日
調査面積	11㎡

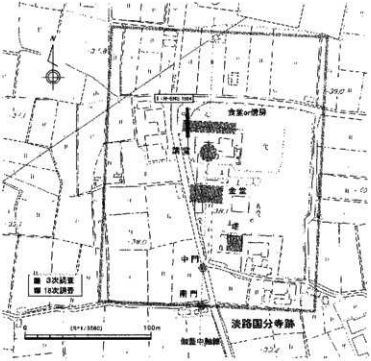
調査の位置

1　調査内容

本調査は、淡路国分寺跡内で計画されている浄化槽の設置に伴う本発掘調査である。

調査は、地下に掘削が及ぶ現在のトイレ北側の浄化槽部分と東・南の配管部分、客殿からの生活排水口確認（３～７区）を対象にして、人力で進めていった。なお３～７区については、排水口の確認であったため、３区を除いてベースまでの掘削は行っていない。

調査の結果、トイレ東・南の地区と６・７区は現在に至るまでに攪乱を受けていたが、浄化槽が設置される２ｂ区と３・４・５区においては攪乱等の影響が少なく、遺存状態が比較的良好な部分があることがわかった。



調査区設定図

調査面積が狭小なため確認した遺構は少ないが、主な遺構には２ｂ区の土坑（ＳＫ２）がある。規模は、幅約2.5m、深さ約0.25mを計測し、南東～北西方向に向かって伸びる。

出土遺物は非常に多く、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器の他に瓦類があり、特徴的な遺物を幾つか紹介する。3～8・16・17は、須恵器・土師器の坏Ａで内外面に煤の付着が認められ、油坏として使用されたと思われる。15は洛北産と思われる緑釉陶器埦で、底部は削り出し高台で内外面にはうすいオリーブ色の釉薬が施される。25は黒色土器鉢（Ａ類）で底部外面に「正八」の墨書が認められる。

軒瓦は軒丸瓦が３種類３個体、軒平瓦が３種類６個体出土している（軒瓦出土点数表参考）。また32は道具瓦の隅平瓦で凸面には縦方向の縄タタキ、凹面には布目が残る。色調がにぶい黄橙色をなし、創建期の軒瓦と同様な色調を持つ。一般的に隅平瓦は寄棟もしくは入母屋造りの建物に使用される

番号	種類	型式名	点数	備考
26	軒丸瓦	ＳＫＭ０１	1	
27	軒丸瓦	ＳＫＭ０２	1	
28	軒丸瓦	ＳＫＭ３４	1	
29	軒平瓦	ＳＫＨ０１	4	
30	軒平瓦	ＳＫＨ１６	1	脇組
31	軒平瓦	ＳＫＨ１７	1	

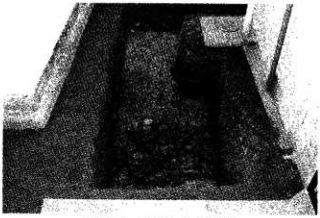
軒瓦出土点数表
（型式名は『国分遺跡』2004に追加）

ことから、調査区西側には、同種の構造を持つ瓦葺建物が想定される。

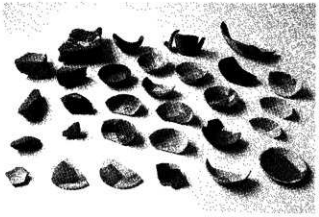
これら遺物の年代は、瓦類については耐久年代の関係から淡路国分寺創建期（８世紀後半頃）を含むものの、土器の年代は創建期よりむしろ９世紀に入ってからのものが主体になると思われる。

２　まとめ

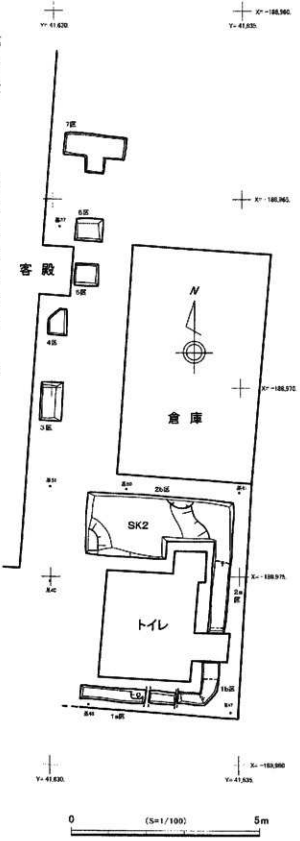
以上本調査により、伽藍中枢部において部分的ではあるが、撹乱の影響を受けていない部分が遺存していることがわかった。特に２ｂ区を中心に確認した資料は、法会に使用された油坏、官位を意図すると思われる墨書土器や建物構造を復元できる道具瓦等非常に興味深い資料が含まれ、年代的には遺物の特徴から1984年度に実施した３次調査の１ＴＲ６ＮＳ調査区から出土した遺物と同じく、一次講堂廃絶期の資料と評価できよう（『淡路国分寺跡』三原町教育委員会1993）。　　（坂口）



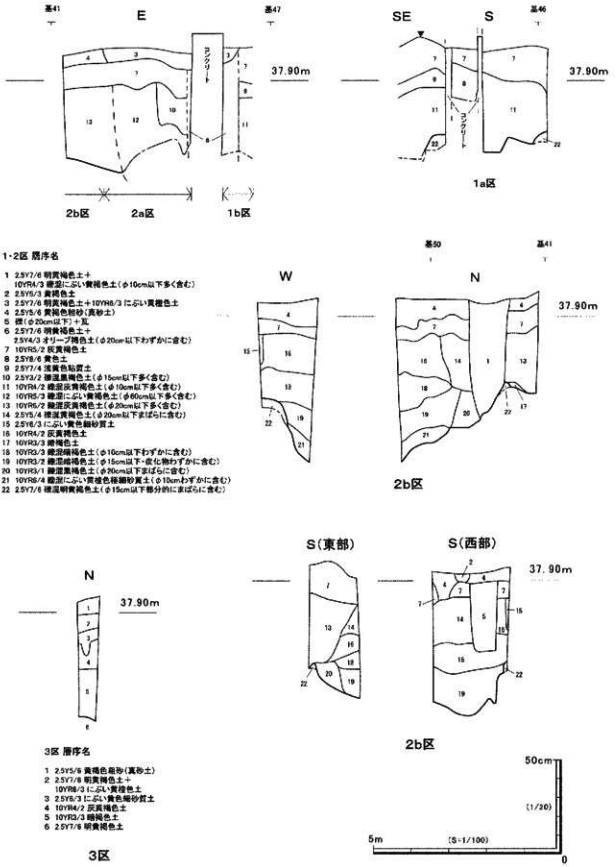
２ｂ区　SK2（西より）



出土遺物



調査区平面図



1・2区 層序名

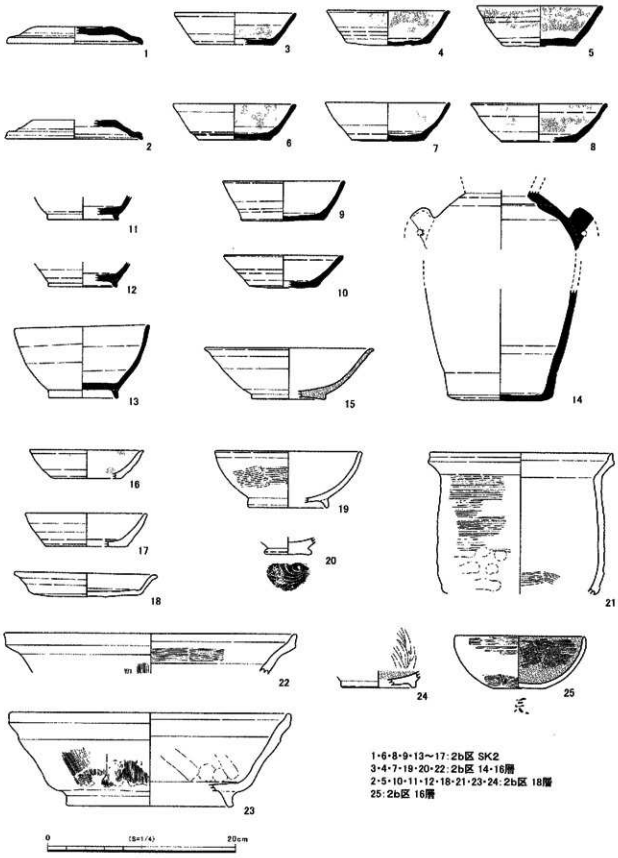
1 2.5Y7/6 明黄褐色土＋
10YR4/3 褐湿にぶい黄褐色土（φ10cm以下多く含む）
2 2.5Y5/3 黄褐色土
3 2.5Y7/6 明黄褐色土＋10YR6/3 にぶい黄橙色土
4 2.5Y5/6 黄褐色粗砂（真砂土）
5 礫（φ20cm以下）＋瓦
6 2.5Y7/6 明黄褐色土＋
オリーブ褐色土（φ20cm以下わずかに含む）
7 10YR5/2 灰黄褐色土
8 2.5Y8/6 黄色土
9 2.5Y7/4 淡黄色粘質土
10 2.5Y3/2 褐湿黒褐色土（φ15cm以下多く含む）
11 10YR4/2 褐湿灰黄褐色土（φ10cm以下多く含む）
12 10YR5/3 褐湿にぶい黄褐色土（φ60cm以下多く含む）
13 10YR5/2 褐湿灰黄褐色土（φ20cm以下多く含む）
14 2.5Y5/4 褐湿黄褐色土（φ20cm以下まばらに含む）
15 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂質土
16 10YR4/2 灰黄褐色土
17 10YR3/3 暗褐色土
18 10YR3/3 褐湿暗褐色土（φ10cm以下わずかに含む）
19 10YR3/2 褐湿暗褐色土（φ15cm以下・炭化物わずかに含む）
20 10YR3/1 褐湿黒褐色土（φ20cm以下まばらに含む）
21 10YR6/4 褐湿にぶい黄橙色粘質砂質土（φ15cm わずかに含む）
22 2.5Y3/6 褐湿明黄褐色土（φ15cm以下部分的にまばらに含む）

3区 層序名

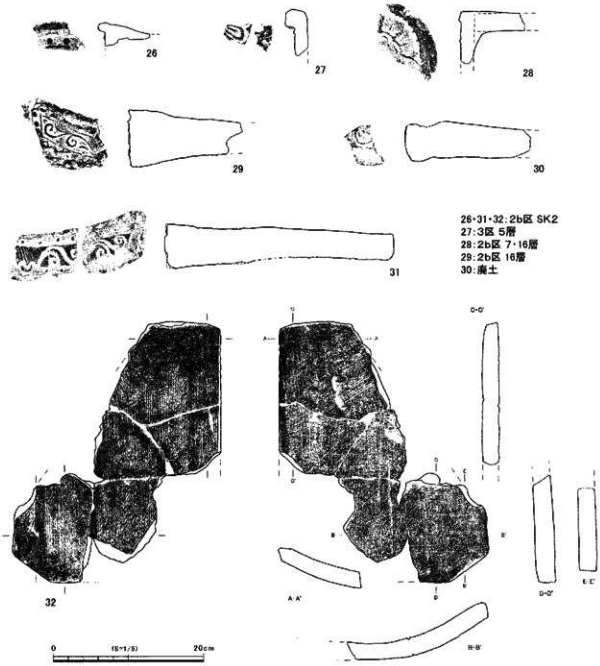
1 2.5Y5/6 黄褐色砂質（真砂土）
2 2.5Y7/6 明黄褐色土＋
10YR6/3 にぶい黄橙色土
3 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂質土
4 10YR4/2 灰黄褐色土
5 10YR3/3 暗褐色土
6 2.5Y7/6 明黄褐色土

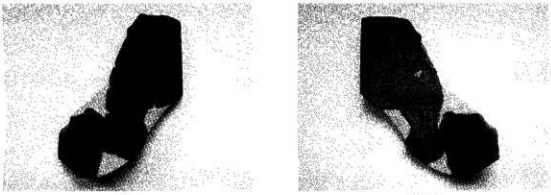
3区

1・2・3区 層序図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
0
(S=1/4)
20cm
1・6・8・9・13～17：2b区 SK2
3・4・7・19・20・22：2b区 14・16層
2・5・10・11・12・18・21・23・24：2b区 18層
25：2b区 16層

出土遺物1


26
27
28
29
30
31
26・31・32：2b区 SK2
27：3区 5層
28：2b区 7・16層
29：2b区 16層
30：廃土
32
0
(S=1/5)
20cm
A-A'
B-B'
C-C'
D-D'
E-E'



凸面　　凹面

出土遺物2

2012年3月29日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅴ
2008年度　埋蔵文化財調査

発行　南あわじ市教育委員会
編集　南あわじ市埋蔵文化財調査事務所
〒656-0455　兵庫県南あわじ市神代国衙1100
TEL 0799-42-3849
印刷　はと商業印刷
〒656-0341　兵庫県南あわじ市津井2606
TEL 0799-38-0844